
ランブル空もよー

現

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランブル空もよー

【Nコード】

N0952C

【作者名】

現

【あらすじ】

同級生兼幼なじみというある方面にはニーズありそうな関係の女の子は、僕にとっては災難というか天災というか局所的第三次世界大戦みたいな存在であった。

ホタルと空の今日の経過

さて。いきなりだが世の中には理不尽なことが溢れている。

アイドルが猫かぶって愛想振りまいている一方で、主婦のみゆき（仮名）はぽっこりお腹に苦しんでいたり。

少年太郎（仮名）が交通事故で入院している間に、クラスメートは海水浴を満喫していたり。

わざわざ記名までした弟のとおきデザートを、あっさり警告無視して腹に収めやがるバカ姉が存在したり。

挙げればキリがないほどに、理不尽はそこかしこで発生している。たぶん世界の総人口に匹敵するぐらいの数は。

また特性として、被害者は無作為に選ばれてしまう。

たとえ一日万善を実行していようと、世の中を良くするため国会議事堂で居眠りしていようと、襲われる確立は完璧なまでに均一なのだ。

いやはや。まったくもって理不尽なことだ。

ところで、志之坂 螢斗こと僕がなぜこんなにも理不尽について考えを深めているのかといえば、現在進行形で僕がめちゃくちゃ理不尽なことに巻き込まれているからである。

「というわけだからさ、買い物につき合っつてよホタル」

関係としては同級生兼幼なじみの少女である朝霧 空は、前ぶれもなく同行を依頼してきた。

ちなみにホタルってのは僕のあだ名。空しか使わないけども。

放課後。みんなが部活やらで青春している時間帯、僕は鞆に教科書を詰めながら、可能な限り簡潔に意志を表明することにした。

「却下」

「なんでよ。っていうか少しは考えてから返事しなさい」

案の定、空は唇をとがらせる。

「もう一度訊くわよ。買い物につき合っつてくれない？」

「わかった。僕の脳内論議で充分検討のうえ、全身全霊で却下させてもらう」

「なぬう〜」

獣っぽく唸る空をほっというて、帰宅準備は早々に完了。さて、家に帰って近代つこらしくゲームでもするか。

席を立ち、教室にさよならしようとした時だ。通り過ぎる最中、空にいきなり襟首を掴まれた。

認めたくないが僕は背が低い。中学二年だから成長期はまだなんだろうけど、とりあえず现阶段で僕より背が高い女子はいっぱいる。

空もその一人だ。彼女が首を絞めて持ち上げれば、僕は必然的につま先立ちの格好になる。

「なにすんだアホ……」

「ホタル相手に下手にでるのが間違いだったわ。買い物に付き合いなさい。これ命令形」

「なんで上から目線なんだよ」

「身長之差ゆえよ」

「おまつ……僕が気にしてんの知ってて」

このやるう。というかそれどころじゃないや。そろそろマジで息が……さ、酸素が。

水を失った魚のごとく僕が口をパクパクさせていると、空は追い討ちかける科白を吐いた。

「そうだ。同行してくれないならハコ姉さんにご報告して差し上げないかね。『ホタルの馬鹿があるうことか私をいたぶり、もうなんというか少年誌じゃ描写できない破廉恥な行為を』」

「ちよい待て堂々と本人の前で情報捏造すんな空っ！」

「ほおほお。ホタルでもやっぱり姉さんは怖いとみえる」

「にやる……」

悔しそうな僕とは正反対に、得意げな表情をつくる空。僕としては、悦に入っている暇があるならこのカツアゲっぽい図をどうにか

してほしいんだけど。

そんな僕の望みを知ることもなく、空は意地悪そうに口の端を引き上げ、にやりとしか表現しようのない笑みをした。

「ホタル、買物付き合うわよね？」

空に進言したい。この場合の選択権は、あつてないようなものだと思います。

なんて理不尽なんだろうこのシチュは。

返事をしようにも溜め息をつこうにも、息が詰まってどうしようもない。やはり理不尽だと、酸素不足の頭で僕は思った。

空のいうところの同行。ぶっちゃけると荷物もち。

次々と肉やら野菜やらが放られるカゴを運びながら、当然僕は不機嫌である。にしても、空は何を作るつもりなのだろう。そろそろ総重量4kgを超えそうなんだけど。重い。

てか今更だけど、

「納得いかない……」

ぼやく僕を空は振り返り、アボガドみたいな物体をカゴに投げ入れる。レジ通すまで店の商品なんだから乱暴に扱うなっのに。

「ホタルは器が小さい」

脅迫する人間よりはましだと思うけど。

「だいたい幼なじみが両親不在で夕飯の買い出しにいくっていったら、男は無条件でついてくるものなの。これ鉄則」

「漫画・ドラマの観すぎだ。ただの隣人ってだけの存在概念に、訳の分からない妙な期待するなよ」

「……」

目を細めた空は、今度はカボチャを二個ほど投げつけやがった。事もあるうちに僕の頭めがけて。

僕に武術の経験はないが、小さい頃から姉さんに苛め……鍛えら

れているためだろう。異常な耐久力に反射神経、そしていくらかのトラウマを僕は得ている……ってDVじゃんか。

「はあ……」

二酸化炭素を肺から叩きだすとともに、僕は力ボチャを右手で受け止めカゴに置く。もはや一杯一杯で、置く作業から積む作業に移行しつつあるな。

ところでいい加減にレジに向かってほしいんだけどな、とささやかな願望をもって見失った空の姿を探すと……いた。菓子コーナーだ。なぜに。

数人の園児がお菓子を眺めるのに混じってしゃがんでいる空へと近づくと、彼女も気づき僕を向いた。

「これ買ってホタル」

彼女が両手で突き出すのは、するめに柿ピーという実にオヤジくさい品だった。こいつの嗜好はよく分からないな。

まあ当たり前の品だったところで結論に変わりはないのだけれど。

「却下。何故ねだる。自腹で買いなさい」

「人から奢ってもらうことに価値があるの」
ほっ。

「なるほど。なら僕も空に奢ってもらおうか」

「それは無理よ」

「なんで」

「私がホタルに買ってあげたら、それは施しになっちゃうから」

「……とりあえず今の一言で、空の中での僕の位置付けが判明したね」

この件については、後日ゆっくり話し合う必要があるそうだ。

僕と空の家までの帰路は、隣同士だから一緒となる。その道中、突然空が尋ねてきた。

「ババロアって奇妙だよ。そう思わない？」

「意図不明の質問を脈絡なく繰り出す人は奇妙だと思っけど。そもそもババロアって何？」

「ババロアは洋菓子よ。牛乳に砂糖いれてゼラチンで固めるの。苺とかいれておくと美味しいかな」

「ふーん」

意外だな、空が洋菓子に詳しいなんて。苺なんて年頃の女の子っぽいワードがああ口から出るのはもつと意外。

「でも、なんでババロアが奇妙なのさ？」

「だって、ババロアのくせに旨いのよ」

くせにも何も、いくら見つめられたところで、空の気持ちに一切共感できないんだけど。

こいつ大丈夫なんだろうかと見つめ返すと、やれやれと空は片手を腰に当て、まるで講釈を聴かせるようなジェスチャーを行いだした。

どうでもいいけど、公共の場でやめてほしいな。傍目からは説教されてるみたいだろうし。

買い物袋二つを運搬する僕の憂いなど感知せず、空は熱弁を振るいはじめた。

「だってババロアよ？ 濁点保有率50%ってなんかこう発音的にすごく不味そうなのに、すごく美味しいの。こう、感触がとりにゅもって」

濁点保有率、ね。まさか食べ物の評価基準で見た目の視覚と味の味覚以外に、商品名の響きなんて聴覚要素があるとは知らなかったな。

それと、とりにゅもってのは食感を表現する擬音なのだろうか。とりにゅもつとりにゅもつとりにゅもつ……ああ、やっぱイメージ無理だ。

ん？ というかおかしくないか？ ああいや、空の頭蓋骨の中身の話でなくて濁点保有率の話。

彼女を見上げながら僕は問いかけてみる。

「でもさ空、スーパードアボガドみたいな買ったよな。あれなんか四文字中三文字が濁ってるけど」

ババロア以上に濁点の多いアボガドをなんで買ったんだか。空の理論じゃきつと敬遠したいはずだろうに。

その疑問に空は僕を見下ろす格好で、

「アボガドは食材だもん。単体では食べないでしょ？ だから濁点保有率は『アボガド入りカレー』で考えるの。そしたら割合低いからオツケ」

「基準をいまいち理解できないけど……っっていうかカレー作るの？」
僕は袋の中身を思い返してみる。豚肉、じゃがいも、人参、りんご。これは許容範囲内だけど、なめ茸やキャベツや昆布も鍋にぶち込むつもりだろうか。誰が作っても不味くできないというカレーの不思議パワーでも、さすがにカバーしきれんだろうよ空。

空の料理センスに致命的欠陥があるのを存じている僕が彼女の行く末を案じていると、おもむろに空は前に進み出た。

「ホタル、お腹すいたから急ぎましょ。飢えは暴動の引き金になるのよ？」

それは困る。空が暴走すれば被害者は僕に確定じゃないか。一番近くにいますし。

ため息を後ろに残し、駆け出す彼女を追いかける。つくづく理不尽だなあ。もしや前世では悪代官で、今の僕が受けているのはその報いかもな。

哲学っぽく不運な境遇をなげていると、身の軽い空はさらに加速し、いらんことをぬかした。

「ホタル早く早く！ 夕飯ぐらいは食べさせたいから。私の特製カレーかつこ真心オブ幼なじみ100%！」

「モチベーション下がるなあ……」

僕に対する空の真心なんて劇薬並の不純物だろう。たぶん色はどす黒い。

「……………」
朝霧家の食卓。小さい頃からあまりに馴染みすぎて、自宅と同じくらいにくつろいでしまっている僕だった。状況が状況でなければ、エプロン姿の空により卓上に並べられた物体に、渋面になるというか表情が凍る。

「遠慮なく食べていいからね」

「……………」

思わずうなってしまう。

荷物運びの用件を終え速攻で逃げ帰ろうとした僕だったが、あえなく玄関口において阻止された。襟首つかみ巴投げを決めたのち瞬時にマウントポジションへ持ちこむという中学生がなぜ会得しておるのだコンボで僕を締め上げる空に、

「屋根づたいでホタルの部屋に入れるんだけどなー」

などと拳の関節音をオプシオンに言われれば脱獄の目論みなど捨てざるを得ないです。

幼なじみの存在を呪ったのは何度めかな。脅迫に僕はあえなく屈服してしまいました。

泣く泣く僕は着席して『胃袋が耐えられるレベルだといいなあ』と淡い希望を抱いた。匂いからしてカレーの範疇を逸脱してるので諦めようかね。さようなら僕の寿命。

と若死にするわけにもいかないの、空作成の『カレー』を前に僕は頭を下げた。

「ごめんホント無理」

「……………」

「いやこれは無理だろ食いもんじゃないよ多分きつと絶対確実に」

「なんでよ」

いやいやいやいや。空の五感はどうなっているんだよ。

絵の具全色を考えなしに混ぜくったときのような見るからに有害物質っぽいこの色といい、メタンガスよろしく不気味に音たてて沸き上がる泡の臭いといい、視覚・嗅覚の二種目でぶっちぎり一位じゃないか。下向きベクトルに。

こんなものに食欲をおぼえるほど僕は切羽詰まっていけないわけで、すすつとカレーを対面の空のほうへやり、僕は再び謝った。

「とにかく無理ごめんすいません。空の手料理はやわな僕の胃袋には荷が重い」

こうなれば無理の一点張りで通そう。それしかない。

僕は頭を下げつつづける。沈黙。沈黙。沈黙。沈黙。……な、なんだこの気まずい空気は。

不安にかられ僕が頭を上げるのとほぼ同時、肺活量一杯の盛大なため息を空が吐きつけた。

空はカレーを一瞥し、そして茶色い羽の力サカサ動くあいつを相手にするのとさして変わらない視線を僕に移した。

「まあ……そこまで嫌ならいいわ」

お、空もようやく自分の料理の凶悪さに気付いたのか。えらい、えらいぞ空。

ありがたやありがたや、と彼女に両手をあわせ拜んでいると、空は頬杖ついて、

「そーよねー。わたしの料理なんてそんなもんよねー。幼なじみの手料理を食べられるシチュの価値を知らないホタル様のお口には合わないわよねー」

……ああ、拗ねてるなこいつ。

「あのさ空ちよっ」

「ま、いいけどさ」

繕おうとする僕の言葉を空の不機嫌な口調が遮断する。まずい。

長年の付き合いでわかる。空は またもや理不尽なことに お怒りだ。

「明日学校でモッチーとくうとみちさんに慰めてもらうからいいもんね。私が丹精込めて作ったカレーをホテルが遠まわしに『てめえの料理なんぞ食えるかいこんなの犬どころかアイボでも後ろ足で砂かけるっての』なんて酷評したって言いふらすから。学校規模で八ブってやるから」

事実をねじ曲げてねじ曲げてねじ切ってるな。よくもまあ僕の謝罪のニュアンスを好き勝手に自己解釈してくれたもんだ。まあ実際当たってるけどさ。

というかぶっちゃけピンチだな僕。空は人格破綻者の割に、やら交友関係が幅広い。本当に怒った彼女なら、校内放送を使って虚実構わず個人情報ばらまきそつだ。僕のフェチとか僕のアレな本の隠し場所とかそんなのを。

「……わかったよ。食べる。食べればいいんだろ」

「そう、たーんとね」

諦めた。僕はスプーンをひつつかみ、皿に盛られたゲソ汁ご飯を憎々しげに睨みつけた。

「ふうう……はああ」

一度ゆっくり深呼吸。よし、覚悟を決めよう。恐る恐る僕はスプーンを『カレー』に差し込……ああああああナマコみたいな感触があああどうなってんですか空さああああん！アボガド？もしやこれはアボガドなんですか？爬虫類みたいな感じのこれは！あかん。これはあかんよ。これ絶対命に別状あるってえ！

すでに腕は震えるはじめている。なんか遙か太古から受け継がれているんだろう本能がじゃんじゃん警報鳴らしてる。

やっぱ無理だ。消化系がこぞって拒絶する。赦しを請おう。僕はすがる目で空を見つめた。

空は、僕を見つめ返してにっこり微笑み、ゆっくり頷いた。いけ、と。

.....。

次の日、僕は学校を欠席した。

親睦の名の下に(前)

聞き間違いの経験はきつと誰しもがあることだろう。ちなみに僕は『I軌道! ? なんか響きかつちよええええ!』と合気道という武術の認識を小学五年まで誤っていたし、薬剤師のことを『ヤクザ医師! ? 病院こええええ!』と日本の行く末を去年まで真剣に案じていたりした。

今となつては思い出といえるなあ。僕がそんな感慨にふけっていると、僕の頭をペチペチ叩きながら同級生兼幼なじみの少女が顔をのぞき込んでいた。

「で、どうなの?」

「ああごめん。聞いてなかった」

「うい」

ペチペチからゴツゴツに変化した拳の打撃音を頭上に、僕は彼女のおっしゃった内容を思い出してみる。してみるものの、元々聞いていないから無理な話なただけだね。

はっはー思い出せないやーと笑っていると、その表情がお気に召さなかったのだろう、空は僕の鼻をぎゅぎゅとつまみ怒気を含んだ強い口調で言葉を放った。

「もう一度だけ言うからね。『懇親会』を開きたいから立案してほしいんだけど!」

前席に座る空は最後のどっ!に合わせて、僕の鼻をツイストした。もげるっつーに。

呼吸のできぬ鼻の心配をしながらも、空の言った『こんしんかい』とやらの意味を僕は推察してみる。

第一候補としては……『渾身会』だろうか。うわっ、どこことなくダサイ暴走族のチーム名みたいだな。しかしなんだ、パラリラする姿の空がものすげえ想像しやすいのは僕の彼女に対する観念の表れなのか。

「ホタル。あんた変な妄想してない？」

「心外だな。公道で暴走するような輩に言われたくないよ」

「うい」

空は目を吊り上げて、つかんだ鼻をシエイクシエイク。だああああああ冗談の通じない相手だああああああ。

縦に揺さぶられる頭の中の『魂神界』というワードを僕は仕方なく破棄し、真面目に『懇親会』について意見を述べることにした。

「なんで今さら懇親会なのさああああ」

なんか視線が天井と床を猛スピードで行ったり来たりしているよ母さーん。それに空さーん息が苦しくてまともに喋れないよー。とめてー。

「……………」

と、いきなり空は手を止めた。おおっ祈りって通じるものなんだ。僕の顔が青くなりつつあったせいかもしれないけど。

乱れた制服と息をふうつと深呼吸一つで整え、僕は率直に思ったことを口に出すことにした。

「あのさ空。懇親会の意味を理解してる？」

「えつと……………懇親する会」

「小学生みたいな解答だな。懇親会ってのは要するに、親睦を深めることを目的にした会合なんだ」

「なんか急に偉そうに解説するわねホタル」

無視。

「そういつのつて初めて会うような人達とやる場合か、打ち上げも兼ねて行事の後にやる場合のどっちかだろ。小・中一緒のやつらなんてお互い飽きるほど顔あわせて来てるんだから、懇親会なんて今さらだね」

「親しき仲にもなんとやらって言うでしょ。なんとやらには懇親会が入るの」

格言に伏せをいれていいのか。空のことだから都合よく使いそうだなあ。後々が心配。

大体が、なんで懇親会をしたいなんておっしゃってるんだか。連中とは毎日学校でドンチャンやってるのに。

「開くかどうかはともかく、企画理由は何なんだよ？」

「え？ そそそりゃ懇親じゃない」

「じーっ」

効果音つきで僕は空の瞳に焦点を絞り込む。

「他に理由あるんじゃないの」

「な、ないってば」

あ、視線逸らした。いつもは目が合ったら相手が逸らすまでずっと睨みつづけるのに。これは何か、やましいもしくはくだらない理由がありそうだ。

ふむふむ。ではとりあえず、事情聴取といこうじゃないか。うつつつけの人材がうちのクラスにはいることだし。

「くう、ちよつとこつち来てくれないか」

「んほえー？」

三限目後の休み時間。クラスメートが雑談に興じているなかで唯一眠りこけていた少女が、実にまぬけな寝覚めの声でこちらを振り向いた。

彼女は御仄みほのか・玖珠歌くすか。姓も名も実に奇態な玖珠歌のことは、学年の大半が「くう」と呼んでいる。

うつつ伏せだったせいだろうか。くうの鼻の頭は真っ赤であった。

「まだ眠いっすよ志乃っちー」「一限目からぶっ続けで寝てるだろ。いい加減に起きて、ついでにこつち来てくれ」

「えーやーだよー……………。くう……………」

「おいこら二度寝するな涎も垂らすな女だろお前見苦しいなまったく」

「労働意義2ペソ、現実の世界10ドル、睡眠時間プライスレス…

…」

こいつ病気だ。

「 というわけだ。よろしく頼む」
「うーっす」

欠伸混じりに僕の依頼を承ったくうは、警戒心むき出しの空の隣に着席した。依頼、すなわち懇親会提案の理由をなかなか話そうとしない空の口を割ること。さて、今回はどのようにやってくれるかな。僕は傍観することにしよう。

ちなみにくうの攻略はすでに始まっている。面と向かい合う正面でなく、隣に座るという選択。

これはくう曰わく、正面から対峙する時のような威圧感を与えないためと、ボディ・バッファー・ゾーンっていう相手が親密さを感じる距離に侵入するためのらしい。

と、開始のようだ。

「やあやあ空たん」

「やあやあくう。あんたホタルに買収にされやがったわね」

「そだよ」

「……。で、今回は何と引き換えに依頼受けたの」

「ましゅまる。ほら」

「ましゅ……ってああもう見せなくていいから。というよりホタルのやつ何でマシユマロ常備してるのよ……」

「まひゅまるはひゃひゅめいやよねー」

「口一杯に詰めてしゃべりなさんな。ほんと食つと寝るで基本行動が構成されてるわよねあんた」

「遊ぶが抜けてるよー」

「皮肉だつてのに」

「へえー。あ、でいきなしだけど空たん空たん、遊び好きなおいたん的には懇親会……だっけ？ 実はものすごい賛成なんだけど、やるとしたら日にちはいつの予定ー？」

「もちろん今度の日曜日よ」

「ふーん。あ、そういや空さんは日曜朝のアニメ観てる？」

「まさか。あんなの観てるのは小学生くらいでしょ」

「おいたんは欠かさず観てるけどな」

「ああ、そういえば戦隊ものとか好きだったわねあんた……」

「うん。やっぱり個人的にはカクレジャヤーがお勧めかなー。まあ戦隊もの以外でもお勧めあるから、今度厳選タイトルからどれか貸してあげよっかー？」

「いや遠慮しとくわ……。というか腕組んで偉そうにアニメオタなの公言すんな」

「みんな知ってるから問題ないんだなーこれが」

「学年にオタクが知れ渡ってるのってどうなんだろ……」

「いやいや。まだまだおいたんは端くれだよー。やっと経歴十年だし」

「中学二年において人生のほとんどじゃない」

「甘いなー。アニメは奥が深いんだよー。空さんはわかつちやいないなー」

「なんかくうを親友と呼んでいいのか迷ってきたわ……」

「そうかそうか。ならば師匠と呼びたまえ弟子1st。よし、さつそく今度の日曜は一日ぶつ通しのアニメ漬けだー」

「アニメ漬けか。農作業よりはそっちの方がマシかもね……」

「んん？ もしかして今度の日曜はなにか用事あるの？」

「うん。祖父ちゃんちが農家でさー、今度の日曜に手伝いに行かないやならないのよ。母さんはママさんバレーで兄貴は部活合宿の予定があるから、父さんと私と二人だけ行くのよねー……」

「たしかに農作業はキツイよねー。やったことあるから分かる分かる。じゃあさ、おいたんとアニメ観る約束があるって逃げればー？」

「それがさー、個人的な約束はダメなのよ。学校とか地域とかの団体規模じゃない限り、父さんが認めないんだ」

「ほえー大変だねー。あ、だから懇親会やろうとしたのー？」

「そうそう。懇親会ならクラス規模だから逃げられるのよね」

そう空が発言したのと同じく、くうは僕に向けて親指を立てた。空も続いてハツとした顔を僕に注ぐ。

「任務完了です隊長！」

「うむ。ご苦労だ」

「なっ……………」

ちなみに僕は二人の会話をすぐ傍で一字一句聞いていた。無言だったから存在感がなかったかもしれないけど。

しかし、毎度毎度くうはうまく誘導するもんだ。おかげで僕は今、しまったって感じで悔しそうな表情の空を拝見している。やっぱり普段見れないものを見るのは面白いな。

「自分をどうもありがとう、空さん」

笑顔で僕がそう皮肉ると、空は顔を真っ赤にした。

「っ……………くう！」

「によははー」

「うわっ、間延びした声がこの瞬間に限って無性に腹立つわ！」

さて。空が自ら理由を暴露してくれちゃったわけなんだけど…………

「めっさめさ私的な理由だなあ」

「むむむ……………」

誘導尋問要員のくうが報酬のマシユマロを頬張っている図を背景に、呆れた僕は机に肘つき頬杖していた。

対して空は縮こまるように体を竦め、

「だって農作業なんてしたくないんだもん……………」

などとぶつぶつ呟いている。

「たまには労働に勤しんでみたらどうだ」

「いやーだ。あれは拷問だってば。……………無給だし」

「そりゃ、祖父ちゃんにバイト代要求できないだろ。年金暮らしは意外とシビアなんだぞ」

「未だに鍬で一日三ヘクター耕すあの祖父ちゃんにシビアも何もないわよ。野菜も祖父ちゃんに似たのか、やたら良く育つんで市場じゃ高値らしいし」

「なんか納得してしまう僕がいる……」

というのも、実物の空の祖父ちゃんに会ったことがある、もとい農作業手伝ったことがあるからなんだけど。

六十過ぎてるはずなのに無意味にハツスルしてるし、腹筋は六つに割れてまさに鋼の如しだし、口癖は『働け新兵くたばれ対敵』だし、なんとというか『男』というか『漢』だなあのは。ちなみに対敵ってのは鮪のこと。農業やる前は漁師だったという。

「……ねえホタル、懇親会立案してよ。お願い！」

拝むように僕に頭を下げる空。なんかいやに真剣である。いつもいたぶられてる僕としては、ジャインにいきなり弟子入りされたの、太みたいな気分だ。気味悪い。

「思うんだけど、自分でやればいいじゃないか」

「今日は金曜。LHRで企画しなきゃ間に合わないの。お願い。弄る頻度減らすから！殴るときは平手にするから！お望みならメイド服着るから！」

「着なくていい。僕がメイド好きみたいなのその発言やめなさい。つていうか前二つは当然だろ」

「それじゃ何服？」

「はいそこ論点違う！」

「もう、じゃあなんなのー！」

すげえ必死に空は懇願してくる。目は若干涙目だし、それに段々となりふり構わずになってきてないか。要するにそれほどに農作業が嫌ってことなんだろうけど……。

「ふむ」

顎に手を当て、何年か前に興味本位で手伝いに参った時のことを

思い出したりなんかしてみる。

当時小学生の僕は新しい事に対する好奇心で朝霧一家についていたんだけど、空の祖父ちゃん（長いから以降空じい）は初対面の僕を見るやいなや、

『捕鯨じゃ捕鯨じゃー！』

などとボケたことをぬかして僕に鮮やかな一本背負いを放ち、田植え前の泥の中にぶん投げた。今気づいたけど投げ技は朝霧一族の伝家の宝刀なのだろうか。

ともかくその日における小学生の体力とか限界を毛ほども考慮しない空じいの手伝いもといしごきにより、次の日僕は全身が筋肉痛で動けないという通常あり得ない症状に陥った。たぶんトラウマってこうやって増えてくんだな！。

いらん出来事を思い出し突発的ブルーに襲われながら、僕は『煮るなり剥くなり好きにしていいいから！』とクラスメートのいる教室で叫びだす空に視線を送る。

……なんだか空が哀想にみえてきた。

決めた。僕は立ち上がり、机に額をこすりつける空に手を差し出す。

「……よし。空、今回はかりは同情の余地がある。全力で企画立案やってみるよ」

「え？ あ、ありがとうホタルー！」

空は僕の手を握りしめ、何度も何度も感謝の意を述べる。案外こうしてみると空にも可愛いところあるな。

そんな普段なら絶対もたないだろう感情でもって空と握手していると、マシユマロを飲み下したくうが首を傾げて空に訊ねた。

「でもさー空たん。最初っから志乃っちを脅せばよかつたんじゃにゃーの？」

「……たしかに」

おいおい。

金曜六限目。通常はなんか道徳っぽい内容をみんなで論議するた
めのこの時間、

「えーっと、では今日はクラスの懇親会会について話し合いたいと
思います」

僕は教師の代わりに教壇に立っていた。そう、例の件について意
見を求めるためだ。いや、本当はLHRってこんなことに使ってい
い時間じゃないんだけど、うちのクラスは特殊というか。

「んじゃ、すいません先生。この時間はそういうことで」

「おーう、好き勝手やってくれ。俺はパソコンいじるから、あんま
騒ぐんじゃねえぞ」

「ほんと教職やる気ないなカズ先……」

お分かりだろう。橘 和人、通称カズ先と呼ばれるこの男性教員
に、まったく教師にかける熱意がないからだ。しかもカズ先の場合、
先生よりも友達の感が強い。よく言えば親しみやすいつてことだが、
ぶつちやければ精神年齢が僕らと同レベルということ。

カズ先は本気で関わるつもりはないみたいで、これ幸いとばかり
にパソコンのキーボードを熱心に連打しはじめた。これが担任でい
いのか……。

おっと。それは置いといて、僕は僕で論議を取り仕切らないとい
けない。

というのも、僕はある方の陰謀で委員長の任を背負う羽目にさせ
られたから。みんな委員長やりたくないからってある方の話に乗っ
ちやうし……。ある方とは誰か、なんてのは愚問。言わずもがな
っす。

「それで懇親会についてなんだけど、今度の日曜にやろうと企画し
てます。できれば全員に参加してほしいんだけど……何か質問ある

人？」

「はいはいはいはい！」

約一名。がやがやと話し声がする教室で、意味もなくハイテンションで拳手するクラスメートがいる。

よりによってあいつか。

「……他に誰かー」

「おいおいおいおい！」

約一匹。芸人みたいなノリで席を立ち上がり僕につっこみを入れるクラスメートがいる。

そいつ以外、他は誰一人として手を挙げない。くそ、クラスぐるみであいつを放置プレイか。いやこれは……僕があいつをいじるの待ってやがるなみんな。妙に期待する視線を揃って僕に送ってるしむづ。

「……他にいないのか。ちっ、仕方ないな……。それじゃそのお前でいいや」

「せめて名前で呼ばんかい名前です！」

細目の僕を指差して、そいつは文句をつけた。ちっ。面倒くさいけど一応マメ知識程度に説明してやるか。後がうるさそうだし。

「わかったから座れ。マリモ」

「おう、座るとも」

あだ名でそいつをそう呼ぶと、顔の造りからして活発そうな男子生徒マリモは素直に着席した。

本名、まりもと鞆本 たつふみ達文。簡潔に示すなら馬鹿だ。他に特徴といえば……

……僕と同じくらい背が低くて、四六時中元気なところかな。そしてたぶん、空の次くらいに付き合いが長いやつだと思う。

笑顔なマリモを僕は見つめて、

「んでマリモ、なにか意見あるのかよ。目立ちたいだけとかいう理由だったらぶん殴る」

眉をひそめたマリモは腕組みしながら、いつになく敵かな声で、

「……螢斗よ。前から気になってたんだが、女子と男子への対応違

くないか？」

「当たり前だ。野郎にまわす気遣いはミクロもねえ」

「手厳しいっ！ つーか空に似てきてるぞお前。男子に対してだけ」

「はっはっは。僕があんな暴力的で口汚い人間なわけないだろ。生徒手帳に載つてもいいほど模範的な生徒じゃないか」

「いやおい螢斗。そんなの空に聞かれたら」

「聞こえてるわよっ！」

マリモの忠告間に合わず、空からシャープペンシルが直線軌道で投げつけられた。それは銀色の軌跡を残して宙を滑空し、矢のような勢いで獲物^{ほく}へとめがけて ちよっ、以下略！ まじで危ない！

「ぬお………！」

鋭利な筆記用具が目前に迫った。僕はわずかに首を左へ動かす。

姉の鉄拳回避で鍛錬された反射神経のおかげなのか、なんとかギリギリで僕は攻撃をかわせた。気に食わないけど今なら八コ姉に感謝してもいい。右頬かすっただけで済んだんだから。

てか眼球狙ったな空………相変わらずなんて正確無比な攻撃なんだ。自分の中で危険生物リストに一人を今さらだけど書き加え、床に落ちた筆記武器を僕は拾う。

ちらりと黒板をみれば、うわ………凹んでる………。避けたせいで犠牲になってしまったか。無生物なのにすごい申し訳ない気分になるな……。

「空、物は大事にしろ」

「その落ち着いて振る舞う態度がすごい癪にさわるのよね」

内心びくびくだし一瞬走馬灯見えたけどね。

「ともかく話し合い中は物投げるな。うやむやになったら空が困るんだろ？」

「そうね………我慢するわ」

やりとりが一段落したところで、僕は下投げで空にシャープペンを放り返す。彼女が受け取ったのを確認して、僕はもう一度改まった口調で、

「さて、話し合いを続けたいんだけど……意見ある人は？」

「だ、誰か俺に構ってえ……」

亡者のような嘆きの声が前列左端から立ち上る。正確にはその机の下から。

「うずくまって何してるんだマリモ。顔に辞書に乗っけてるのはお洒落のつもりか？」

「乗ってんじゃなくてめり込んでんだ！ それもクラスメートの攻撃で。おい犯人！ というか空」

言い切るより早く、紙束の塊がマリモに激突し、肉っぽい音とアヒルみたいな声が床へと崩れた。

「証拠隠滅か。見事な手際だね空」

「誉め言葉さんきゅ」

「よし。それじゃあ他に、誰か意見・質問はない？」

うーんと大勢が声を重ねて考えだす。

マリモのくだりはいつものこと。慣れたもので、カズ先含めたクラス全員がほっとく方向で一致していた。

念のために僕が追記しておこう。なぜマリモまで空の攻撃対象となっているのか。理由は『ついで』だそうだ。

ともあれマリモ抜きで話し合いは始まった。そして予想外と言わべきか、あれよあれよという間に全部まとまってしまった。

別に僕の手腕が良かったとかではなくて、女子側意見が

『たまには息抜きしたいしねー』

でまとまり、男子側意見が

『クラス会じゃ！ 修学旅行卒業式に次いでカップル成立率三位を誇るイベントじゃあー！』

と一致団結したからだ。一応は望んだ通りになったんだけど……男子はみなアホなのか。つつこむと暴徒化しそうなので止めとくけ

ど。

「……結果論的によしとしよう。それじゃ、懇親会の内容はボーリング・バイキングの昼食・カラオケってことで。全員参加みたいだからバイキングの予約は35人か。よし、ひと通り決定したね。それじゃホームルーム終わろうと思うけど、まだ何かある？」

「はいはい」

僕が教壇からクラスを見渡すと、全員がないないと首を振る中ただ一人、左端の席でまたもやあいつが拳手していた。

「いつの間に蘇生したんだマリモ」

「ふふふ。俺の生命力を甘くみたな」

勝ち誇ったマリモの面をしばらく見つめて、僕は一つの結論を出す。

「ふむ。空、追撃頼む」

「いやおいナチュラルに殺人依頼してんな螢斗！」

「辞書がもう無いから無理。残念ね」

「あつたら投げてんのか空……」

「空たん空たん。わたしの貸したげよーか？」

「くう、お前まで犯罪に加担してんじゃねえ！ ていつか意見させるよ螢斗」

たしかに話が進まないな。始末は後にしておいて、遺言代わりに意見くらいは聞いといてあげようか。

「わかった。とりあえず言ってみろ」

「……なんで今さら懇親会なんだ？」

「う……！」

このマリモ野郎。僕が善意で発言権を与えたのに余計なことを口走りおつて。明智に裏切られた信長な気分だ。

……『こつなれば殺してしまえホトトギス』。信長さん、俺、やってみるよ。

「みんな、マリモの抹消を提案します。賛成の人は拳手してください」

「いや螢斗。いくらなんでも」

「……さんせー」

「ぜ、全会一致!? ちょっ……カズ先! 今まさに目の前で集団イジメが!」

名前を呼ばれたカズ先が、この六限目の時間で初めてパソコンから眼を離れた。

「なんだよ、つたく……」

カズ先は顔をあげて周りをみた。野球部組と呼ばれる斎藤・山本・杉下の三人組がマリモを連れ去ろうとしている状況を即座に理解し、マリモではなく僕に言葉を向けた。

「やるなら外でやるよう言っとけ。体液の後処理は面倒だから」
そしてマリモを一瞥しただけで、カズ先の注意はまたパソコンに戻っていく。まじで生徒に無関係なんだなこの人。

「マリモ。その、なんとというか、……どんまい?」

「俺に優しいクラスはいずこおおおー!」

心からの叫びを教室に残し、マリモは野球部組に担がれ運ばれていった。みんな自発的だなーマリモのことになると。

まあ何にせよ、動機が私的な懇親会は開催が決定だ。実に満足気な空の笑顔を見てしまい、開催当日の日曜も苦勞が絶えなさそうと思っ僕なのであった。

あ、あとついでに。マリモのその後のことは僕の知ったことではない、と。

三話目にして時系列がズレるのはどうなんだろうと思いつつながらの主観的『ウサギ』

中学校における昼食の比率は、弁当：給食でどの程度なのだろうか。少なくとも僕の学校は、大多数を占めるだろうと思われる給食派である。田舎と都会じゃ割合が違うかもしれないけど。

それでなおかつ僕のクラスはカズ先放任主義により、給食時間の班は自由。つまり、大抵が普段つるむ連中と食事時ともにするわけである。みんなお互いに仲は良いんだけど、その中でも特に親密な連中と。

しかし例外もあることを忘れてはならない。だから僕が、空とくうとマリモと飯を同じ班で食べているってのは、親密というより腐れ縁とかそういうのに近いわけだ。

「別称を主人公の運命という」

「何を訳の分からんことを。黙々と食べてるマリモ」

冷たくあしらうと、隣のマリモは本日の給食の汁物、つみれ汁に箸をつっこみながら細めた目を僕に向けてきた。

「親友よ……相変わらず男に厳しいな」

「気にするな悪友。その代わり女子と環境には優しいからいいんだよ」

「その割に私には優しくないわよねホタル」

割って入ったのは、僕の対面に着席している空だった。彼女は実に不満げにそう言って、一気に牛乳を飲み干した。色気ねえなあ。

風呂上がりつぽくぶは「っ」と息を吐く空にオッサンの称号を心で与え、僕は炊き込みご飯を口に放る。うまい。

「空はさ、なんか勘違いしてるけど」

「ん？ なによ」

「僕の女子の定義では、幼なじみに危険度Aのプロレス技かけたり、夜中に屋根つたいに部屋へ侵入して徹ゲーを強制同伴させたり、柿ピー片手にハコ姉と麻雀する人間は含まないんだよ」

「そ、それ実話か空……」

「なによりマリモその目は。そしてなぜ若干椅子を引く」
「防衛本能だよ」

そして僕も椅子を引いて、空との距離を少し広げる。よし、この位置なら空のリーチじゃ攻撃は届かないはずだ。飛び道具以外は。

さすがに食事中だから食べ物とか箸とかは投げないよなと少し警戒していると、空は悔しそうに僕を見つめていた。

おおお僕が勝った！なんだ、案外単純に防げるんだな空の襲撃。この感動はたぶん伝わらないけど、常々やられている僕としてはよやくー矢報いた感じなんだこれ。

ホッと安心し、勝ち誇る僕。隣のマリモも同じく安堵の息をついていた。この経験は今後活かさないといけな　ちよっと待て。

なんか空が妙案を思いついたような意地の悪い顔を……おおおお！
「もーらい」

僕に手が出せないと悟った空は、標的を別なものへと移していた。その対象は、

「そ、空！　お前僕のデザート……か、返せっ！」

「あらあら。沈着冷静がモットーのホタルさんともあるう方が、デザート如きではしたない」

空は本日のデザートプリンを、右手に彼女の分、左手に略奪した僕の分を掴み、すすっと椅子を引いていた。

僕が必死で身を乗り出すも、机が隔たり届かない。くそ、足が短いのがこんな時にうらめしい。

「返せよ空っ！」

「やだ」

「このやろっ……」

普段なら。そう、フルーツポンチや他のデザートならば、僕はこんなに見苦しい真似はしない。けれど今日のデザートは、

「空、僕の好物が唯一プリンだけって知ってるよな」

「知ってるから奪ったのよ。仕返しは効果的にしなくちゃ」

「仕返しって……子供かお前！」

こんな不毛な争いを繰り広げていると、マリモが妙に大人ぶった口調と態度で空に向かって手を伸ばす僕に告げてきた。

「螢斗。プリンで熱くなる今のお前も相当子供だぞ」

「構わない。とにかく空っ、返せ！」

「……………思うんだが」

呆れた顔でマリモは僕を、そして空を、そしてまた僕を見て、

「席立って、机を回って取りに行けばいいだろ」

「あ……………」

「……………外道ねマリモ。それを言ったらホテルをからかえないじゃないかい」

その直後に空がマリモのプリンを奪取し、僕とマリモが二人で机に乗り出したのは言うまでもない。

「「空さんを女子として認めます。今後は限りなく優しく接します」

」

「よろしい」

結局僕のプリンは、空が捏造した情報をマリモと一緒に揃えて口に出すことで戻ってきた。

僕はプリンを手元に置いておき、安全確保を確認してから再び食事に取りかかった。

「災難だったな。僕のプリン」

「……………食べ物をおいしそうに撫でてる我が親友は正常なのだろうか。哀れむマリモの視線を僕は完全無視し、僕は牛乳をぐっと飲み下す。冷たい感触が喉に気持ちいい。」

と、牛の白濁分泌物を味わいながら、僕はふと思った。

「ねえ空。牛乳って家で飲むと普通なのに、学校だとなんでこんなに旨いんだろ」

「そうねえ……」

僕が振った質問を、予想以上に空は考えている様子だ。天井を見つめるように上を向き、しばらく彼女はうーんと唸っていた。

「多分だけど、学校じゃ水道水しか補給できないじゃない？ 家だと麦茶とかコーヒーとか他の飲み物があるけど、学校だと味がしない水しか比較対象がないわけだから、相対的にランクがあがるというか」

「なるほど。いつになくまともな意見だな空」

僕が空の評価をあげている横、マリモも納得したように頷いていた。

「あれか。学校帰りに買い食いして食べるお菓子とか、深夜に親にバレないように音量小さくしながらやるゲームとか、そんな感じか」
「それは違うでしょ。マリモが言ってるのはこう、微妙なスリルというかそんなのじゃん」

空の否定に僕も重ねる。

「確かに。マリモのそれは、露見すると怒られるけどそれをしたい、つてのからくる駆け引きの楽しさだ」

「いまいち違いがわからねえけどなあ」

「さすが馬鹿ね」

「さすが馬鹿だな」

「ほっとけ。それより螢斗」

マリモは口につみれを運んで咀嚼する。そして一度目を瞑って間を作り、何も掴んでいない箸で対面を指し示した。

「お前の女子の定義には、あれ、含まれるのか？」

あえてつつこまないでおく雰囲気の流れてたから僕も空も放つといたんだけど……マリモはどうやら耐えられなかったようだ。

「うーん」

どうなんだろうと黙考し、マリモの向かい、空のとなり、僕の斜めにいる人物を僕はしばらく眺めていた。

「睡眠欲と食欲を並行して満たしているやつは……まあ、順当に範

「疇外だな」

「によよはあ……」

四人班の内のもう一人、給食中も眠りこけていた少女くうは、無意識に箸の反復運動を繰り返していた。

「これはあれだな。病気と認定していいよな？」

「同意ね」

「同感だ」

「ところでさ」

僕とマリモ、そして先ほど叩き起こされたばかりのくうは、話を切り出す空に顔を向けた。

デザートは最後に残す派の空は最後にとっておいたプリンを口に含んでいる。そっぴやプリンは、噛んでいるんだろうか飲んでいるんだろうか。どっちでもいいけど。

「なんだよ空」

「昔話の『かちかち山』についてどう思う？」

いつもながら唐突な空の話題提起だった。あまりに恒例になりつつあって、習慣化してきているのが少し怖い。

しかし『かちかち山』とは。読んだのは幼稚園の頃だから、あまりちゃんとは覚えてないな。たしか

「たしか、昔々あるところに住んでいた老夫婦が狸を捕まえて、狸汁用につるしていたんだが、爺さんがいないときに狸の口車に乗せられた婆さんが縄をほどいてしまって、自由になった狸に大怪我を負わされてしまう。爺さんが帰ってくると婆さんは怪我をしていて狸は逃げていなくなっていて、爺さんが憤慨し狸を恨んでいるところに通りすがりの兎がやってきて、兎が狸をこらしめてやろうと爺さんに手を貸す。それで簡略化すると、まずは火傷、次に火傷の痕

にからしを塗る、最後に泥舟に騙して乗せて、狸は湖に沈んでめでたしめでたし。 という流れの、エンドがちよつと黒い話だったよな」

「……………」

「な、なんだよ螢斗」

「やれやれと首を振り、僕は無言でマリモの肩に手を乗せる。

違う、違うだろマリモ……。 お前はそういうキャラじゃないだろ。そこは僕の役目だろ。なんで出番をもつてくかなこの野郎は。

ムスツとした僕の視線は、マリモの首もとに注がれる。ビームでないかなあ。

そんなちよつと危ない妄想をしていると、

「あれは幼児向けに修正してあるから危険な描写のそこは省略されてるけど、話の筋はほぼあってるわね。それで、どう思う？」

「はいはい。空さんの意図がわかりませーん」

三人の気持ちを代弁したのは、口元に白い輪を作ったくうだった。確かに、どう思うと言われても漠然としすぎてわからない。

それもそつかと納得して、空は僕らに追伸する。

「私が尋ねたいのは、ウサギは果たして善兎なのか悪兎なのか、ってこと」

聞いてなお、マリモとくうはキョトン顔である。

「どういう意味だ？ そんなん、善い兎に決まってるだろ」

「おいたんもそう思うけど」

マリモとくう二人の同じ答えに、空は小さく鼻をならす。質問しとしてその態度はどうかと思うが、僕には空の問いの真意が分かってしまった。不名誉なことに、僕と空の思考回路は似ているのかもしれない。

ともあれ僕は空の心を代弁する。

「たしかにくう達の言うように、一般認識ではそうだろう。でも実際は、兎は単に自分のストレス解消目的で手を貸したのかもしれない。婆さんは怪我だけど、狸は散々苦しめられた拳げ句に溺死。程

度が違いすぎるしね」

「そゆこと」

「なるほー。なんか兎たんが黒く思えてきたよ」

あっさりと自らの意見を捨てるくうだった。

ほんと周りに影響されやすい奴だよなあ。確固たる持論がないとかじゃなくて、くうはただ天然というか信じ込みやすいというか。

こいつ将来、ナチュラルにネズミ講に引っかけりそうだな。これでみんな幸せー、とか世迷い言を叫びながら。

それでマリモはというと、若干考えた後、ぐるぐると箸で円を描きながら、

「つまりは見方の問題だろ？ 個人によるもんなら、俺は善い兎だと思っけどな。芯から腹黒かったら、たぶん爺さんに蹴りでもいれてるぜ」

さすがに老人虐待で始まる童話はない気がする。というか物語が成り立ってないし。

「前提とか話の筋とかを変えるのはまた別の問題だ。マリモ」

「んじゃ、そういうお前はどつなんだよ螢斗」

「ああ、僕は」

ちなみに僕の意見はこうだ。

「僕は基本的に兎は善性質だと思う。白いし」

そう意見を述べると、なんじゃそりゃと言わんばかりにため息吐いて空が反論。

「色の問題でもないでしょ。それに兎は黒のもいるし。兎はきつと悪の手先よ」

「でも主な印象は白だし。というより、自分より小さい動物はなんか憎めないかな」

でもこれって、背が小さいことを気にしてるからだろうか。うっ、微妙に悲しい。

「ホタルのは偏見ね」

「それはお互いさま」

「うーい。喧嘩に発展しそうなところちょっと悪いけど、一個だけいいかい？」

給食の段階をデザートに移行した僕がプリン片手に空と無言で見つめ合っていると、その冷戦状態を絶つようにくうが遮った。

「それじゃさ、あの『ウサギとカメ』の話はどう思うー？」

訂正。くうは考えなしに油を注いできた。案の定、空は食いつく。「あんなの悪玉の良い例よ。物語における兎はすべからく敵ね」

兎の全力否定を行う空を、いつもの冷静な僕なら鼻で笑っただろう。

だーがしかーし。兎肯定派に一度ついた以上、そして空があくまで主義を貫く以上、僕も徹底的に交戦してやるう。いつになく強気な僕であった。

「いや違うな。あれの真意はきつと、『兎と亀はよく競走をしていました。しかし亀は一度も勝てません』まあ生物構造的に当然なんだけどね。『連戦連敗を繰り返す亀をみて、ある日兎は思いました。自分は、どうも大人気ないな、と』

雰囲気を出すために間を置く。

「……そこで兎は考えました。わざとであることを悟られぬよう、亀にも勝利の感触を味わせたいと。そしてある日、兎は計画を実行しました。競走が始まると兎はある程度先を行った地点で、寝た振りをしました。数時間待っていると、亀が追いつき、そして兎を追い抜き、目論見どおり先にゴールしました。頂上で勝ち誇る亀に兎は、ちくしょうなんで寝てしまったんだオイラは、と悔しがる演技も忘れませんでした」という感じだな」

「なによそれ。童話の根本をねじ曲げる気？ あれは『コツコツ努力するのが大切だ』って教訓でしょうが」

「現代では、物語の意味は自分で探し見つける風潮にある。作者の意図を超越してこそその個性だよ。空のは偏見だ」

「それはお互いさまよ」

「相変わらず頭が固いな。糖分摂取したほうがいいよ空」

「忠告をそのまま返却するわ。ついでに殴ろうかしら」

「そうやって武力に頼るから糖分の必要性を訴えたんだけどなあ…

…」

「それもそうね。ぜひ医学的にその口を開かなくて欲しいわね」

「……どちらも似たり寄つたりのひねくれ具合だと思っただが気のせいかオイ」

横でつぶやくマリモの顔に、空っぽのプリンカップが二方向からぶん投げられる。

クラスの半分ほどが給食を終え、残り半分もプリンに突入した頃合だろうか。

男子の一人が不意に席を立った。なんだろう。僕は首を後ろに回す。見ると発言の主、丸山は、手何かを持っていた。

「俺甘いもの苦手なんだけど、誰か俺の分のプリン欲しいやついないか」

「あ、俺ほしい」

「まって。私も」

「じゃあ僕も」

デザートの譲渡をめぐり、十人程が名乗りを上げた。

そういえばこうやって給食が余ると、去年まではジャンケンで所有権を争ってたなあ。少し懐かしい。

とか思いつつプリンのもとへ集まるクラスメートを観察していると、ふと妙な視線を感じた。

空だ。

「意外ね」

どうやら空は観察していた僕を観察していたらしい。

「ホタル、行かないの？ 好物のプリンよ？」

「僕は量より質派だから。最大で一日に一つまでと決めてる」

「ふーん」

いくら好物でも、食べ過ぎてればそのうち飽きがきてしまうからね。やっぱり制限を与えることで、一個当たりの価値が増すはず。主に僕の気分の中で。

「螢斗のこだわりが俺にはわからんね。微妙なところで謙虚というか」

「そうか？」

「そうだよー。そこら辺、志之つちは損な主義してるよ」
斜めの位置。くうもマリモと似たようなことを言う。

二人はこういうのが、実際どうだろうか。自分としてはザ・一般人のつもりなだけ。僕は首を傾げる。

そして残る空もこう意見した。

「思うに、ホタルは遠慮しすぎなのよ。何に対しても」

それはまあ、空ほどがつついてはいないけど。

「だって聞いてよくう。この間ホタルにカレーご馳走したらね、こいつ、半分も食べきらないうちに家に帰ったのよ。絶対変よね？」

だって幼なじみの手作りよ？ マリモ、点数的に高いわよねこれ」

「……………」

「……………」

「……………」

空の発言に、周囲が何とも例えがたい雰囲気になる。それでもあえて表現するなら、こう、空気が固体化した感じに。

「……………ちよつと。なんでみんな無言になるの」

「マリモ。言ってみろ」

促すと、よしとマリモが仰々しく頷いた。

「怒るなそして心して聞け空。確かにシチュとしては満点だが、お前の料理はパソゲーの主人公が『う、うん。おいしいよ……………』なんて繕うも不可能なシヤレにならない犯罪レベルぶっつ」

「ごめん。それ以上は私の不利益になりそうだったから、黙らせて無害化させてもらったわ」

「そして僕らには有害であり続けるわけか……」

真実としては、僕が量より質を重んじるようになったのはハコ姉が原因であると思われる。

過去の幼き頃、僕が小遣いはたいて買い込んだプリンを、一個を残し姉に奪略されていたことがあった。その一個を部屋の隅で大事に噛みしめた経験は今でも無駄に鮮明だ。よほど傷ついたのでろう。

空の件といい、ハコ姉の件といい、現実はずばら僕に厳しいと思われるようで。メランコリー状態で僕は、マリモの氣道を確保した。

マリモの蘇生はすぐさま完了した。結局、用は慣れなのだろう。打撃対象の経験は僕より多いはずだし。

一息ついたところで、そういえばと僕は思い出す。

「あのプリン、誰のものになったんだろ？」

振り向けば、勝敗が実に分かり易く決着していた。

争奪戦に敗北し打ちひしがれている生徒達の中心で、カズ先が奇天烈に踊っている。どこかの民族の歡喜の舞いかな、と思うけど詳しくは分からない。趣味の域は人それぞれなんだろうな。

趣味。趣味といえば……そう確か、

「空、この前さ、景ちゃん達と公園に行ったの覚えてる？」

「覚えてるわよ。大して何もなかったけどね」

「俺が埋葬儀式の生贄になったのは何でもないことなのか……」

「あれは落とし穴だってばー。マリモンは大げさー」

と、空とくうには小事らしいが、中にマリモがいる段階で穴埋めの作業に突入するのはどうかと。かくいう僕も参加していたけれど、「話戻すけど、あのとき鳥に餌やるのが景ちゃんの趣味らしくて、」特に鳩と先輩らを見てると平和とか普通とかが重要なんだって

改めて認識するよ』、なんて可愛く奇言を述べてたけど、正直鳩つてどう?」

「モッチーの発言も気にかかるけど、最近の鳩は生意気よね」
そうだそうだ確かに確かにと、四人ともが首を振る。

「近頃、近づいても逃げないよね鳩。アレなのに雑魚キャラが『イッ!』って吹っ飛ばないアレくらい無粋だよー」

とくうが不満を言えば、

「飛ぶにしてもやる気ねえんだよなアイツら。地面歩いてる割合のほうが多い鳥ってどうなんだよ」

とマリモが鳩を貶している。

鳩はもともと人家の周囲に寄ってきやすい性質があるが、ここ数年のようにあそこまで無警戒かつ無防備だと、なぜだかこちらが馬鹿にされている気分になってくる。

というより、あの反応速度の鈍さは生物として致命的だよなあ。

それでも絶滅しそうに思えないのが、奴らの凄い点というか。

「もはや平和というより惰性の象徴よね。平和の象徴から除名して欲しいって抗議するわ」

腕組みし、偉そうにふんぞり返る空であるが、誰に訴えるつもりなんだか。

散々な言われよしの鳩たちだが、例えあれが人語を理解したとしても怒らなそうだ。そのくらい、空の言うことも納得できてしまうくらい、鳩はランクは僕だけと言わずみんなの中で下降しているんだな。

が、僕が本当に言いたいのはそんなことではなくて、

「だから代わりに僕は、新しい平和のシンボルには兔を推薦したい。どう?」

「却下きやーつか! 兎は敵、敵、敵。宿敵よー!」

「なんでそこまで兎を目の敵にするんだよ」

「ホタルこそ、なんで獣の肩もつのよっ!」

「兎は愛玩動物なんだよ」

「虫の“ホタル”が動物いうな」

「名前は関係ないだろ名前は！」

再び兎について僕と空が口論揉めしていると、隣からため息を耳にした。マリモは心底呆れたと言わんばかりに、

「……似たり寄つたりの変態具合だなお前ら。しかも軽くデジャブ
っ……！」

二方向から、二人分の食器がマリモに飛んでいった。

三話目にして時系列がズレるのはどうなんだろうと思いつながらの主観的『ウサギ
ノリで書くところなるわけで。そこから辺はゆるめに見逃してほしい
な』と。

親睦の名の下に(中)

来ましたよ。ええ来ましたとも日曜日が。なんだかんだいって休日に外出するのは、遊びといえども辛いものがありますよ。親父、日曜日に家でごろごろしているあなたの気持ちを痛いほど僕は理解しています。

出だしから引きこもりみたいな感想で、僕の貴重な日曜日は開始された。いやー、日差しがうざったいうざったい。朝の日光に対してパンパイア並みの耐性しかもってない低血圧の僕は、集合場所ですら一人うなだれていた。

集合場所。なんの集合場所か。それは、「しっかし遅いな男子連中。懇親会だつてのに、遅刻したら女子に殴られるぞ」

そう、懇親会です。クラス会です。開催動機が実に私的な親睦を深めるための会合なのです。

丁寧語でこんなことを考えながら、僕はそばの柱に背を預けた。こんな時、携帯電話を持っていればと思う。持ったら持ったで、ハコ姉に毎日パシリ扱いさせられそうだけど。

袖をまくって僕は腕時計を見る。そろそろ出発して、別な場所に集まってる女子グループと合流しないといけない時間だ。

男子と女子。両方に対して僕はため息。

「遅刻する男子も男子だけど、女子も女子だよな。オシヤレの最終確認がどうかで、わざわざ集合場所を別々にするなんて」

そこら辺は乙女心とかいう例のあれだろうか。小学校からずっと一緒だから普段を知ってるのに。

「ま、いいけど。問題は野郎共のほうだ。みんなして遅刻なんて一体……」

どこで油売ってんだか、という僕の言葉は続かなかつた。なぜなら

「……………」
いや、もう感想も出ない。代わりに目の前の光景を説明してみると、左に上下インナーまでの服装すべてを黒に揃えた集団と、右に短パン半袖の小学生みたいな集団と、その間中央にヤンキーみたいなダボダボの服をした連中が、三隊一列で行進しているという状況で。

道の真ん中を堂々と歩く彼らには当然、周囲の変態か好奇か憐憫の類の視線がじーっと集まっているわけで。

そんな集団が何故か僕のほうへ向かってくるわけで。何故、何故かって？そんなのわかりきってるわけで

「よおー螢斗！ ……なんで背中向けて高速で離れていくんだおいおい」
「……………」

「無視は厳しいなあ螢斗」
俯き、高速で離れていく僕。真ん中の準ヤンキー組の先頭にいる見慣れた低身長の間違った声がある。

もちろん無視して逃げる僕。それを駆け足で追う三列の男の群れ。うっ、この凶は周りからはどう映ってるのか。

「おい螢斗。遅れたから怒ってるのか？ 意外と神経質だな螢斗。てかさろそろ止まれて螢斗。おい螢斗おい螢斗おい螢斗」

「人の名前を連呼するなー！」
突然の僕の大声に、周囲の注目が集中した。でもなんかここまできたらどうでも良くなってくるね。ああ絶対。

半分やけくそ入った僕は振り返った。そして、視線がぶつかる男の群れに一気に叫んだ。

「マリモ他大勢！」
思いつきり肺に空気をためて、

「お前らなあつ時間ギリギリに来たと思っただらなんだよその服装僕を除いた男子十八人が六人三班にわかれてテーマそれぞれ思い思いの男みたいな格好つてなんだそれ大体なんで班ごとに完璧に同じ服

なんだ気持ち悪いというかもはや気味悪い！」

「おお。一息で活字換算百二文字」

「そこ誉めるところじゃないっ！」

「まあ落ち着け螢斗」

ダボダボな服装のマリモは、なだめすかすように僕の肩に手を置いた。というか、どうせこいつの提案でこんな摩訶不思議な事態になっっているんだろうに。

呆れるやら怒るやらしている、目の前のヤンキーもどきは、それより、と僕の抗議を遮り、

「急がないと集合時間に間に合わないぞ。空に傷を負わされる」

「……………」

なんでこんな時だけまともなことを言うかなこいつは。

十五分後。

僕ら男子組と空たち女子組は、ボーリング場の前で合流した。

このボーリング場は割と最近できた建物で、中学生の行動圏内にあるレジャー施設としては、五指にはいるくらい大きい。何より、造られたのが最近だから、外観も内装も綺麗なんだよね。

とまあ事実確認は置いといて。

「で、あれは何よホタル」

ややご機嫌斜め。というよりは不可解そうな顔の空は、男子の群れを指差していた。

この施設は一階ゲームセンター二階ボーリング場となっている。よくある造りだ。

当然階段を昇る必要があるわけだけど、男子が先行して、一定の距離を置いてその後ろ、女子と、空に捕獲された僕がいる。

女子群れから僕は眺めてるけど、……思いつきり女子は男子避け
ている。露骨だなあ、分かりやすい。

「完璧に同じ服装してるだけで、ああも気持ち悪い集団が出来上がるなんて……。というより、あの目的は何？」

「マリモから聞いた話じゃ、金曜の放課後、『女子にモテる服装とは何ぞや』って議題で話し合いをしてたらしい」

で、意見が三つに割れて、結果があれ。完全に墓穴だな。そもそも多数決取り入れたのが間違いだろ。

「でもあれよね。不思議だわ」

「何がだよ」

意地の悪い笑みを浮かべる空の表情は、まあ、僕には見慣れたものだけだ。

「マリモ達のほうが変なのに、普通すぎて逆にホタルが一番浮いてるのよね」

「うっ」

薄々気付いていただけに、割と傷付く。なんだかなあ……。直接的暴力じゃなくて、精神的暴力まで覚えはじめたよこの幼なじみは。

ボーリングは、1レーンにつき4人が入る組み合わせ。うちのクラスは35人いるから、一つだけ三人の班がある。それはさほど問題じゃない。

まあ組み合わせに関してはちよこちよこあつたけど（空があみだくじを持参していてもそれは空側が勝手に操作できるというバリインチキなもの）、それで何とか組み合わせは決まった。

もう因縁というか必然というか、班の面子はいつも通り。

空にくう、マリモに、そして僕。

わざわざこの人員を固めることもなかったのだと思うけど、ま、これはこれで一興二興。

てなわけは僕は空くうマリモとハウスポールを選んでた。選ぶにしても、中学生の腕力じゃ範囲は限られてるけど。

「ところで螢斗」

僕はマリモから顔を逸らした。

「ど、堂々と無視するな！ 派手に傷付く。こう、ドバドバと！」
ドバドバでもダバダバでも一緒だ。とりあえず無視。そうでもしなけりややってられないというか、でないと反省しないだろう。

素で凹みだしたマリモはさておいて。僕は13ポンドの黄緑のボールを触りながら、

「ねえ。空、くう」

「なによ」

「なんだい螢たん」

猫みたく水色ボールを転がしているくうはあれとして、隣、空はボールが並ぶ棚から目を離さない。視線は合わないまま、僕は話を続ける。

「どの重さが一番ピン倒れやすいとか、そういうのあるのかな」

「厳密にいえばないと思うけど。ほら、やっぱり個人の趣味とか」
資質じゃなくて趣味なんだ。

「大まかに分ければ、速度重視、破壊力重視、スコア重視の三つあるわね。私は破壊力重視タイプ」

「言わなくてもわかる」

思い当たる節でんこ盛り。さすが空だよな、一興というより一驚か一強。

「それじゃ、くうは何を重視してる？」

「おいたんは色とか匂いかな。いいよー水色。あと匂うの」

何気ない会話で匂いフェチを告白したくうだった。

うん。なんか……僕の周りにはまともなのがない気がする。気のせいじゃないのが最悪だ。

かくいう僕も、他から見たらそっち側なのかもしれないけど、うむ、それは考えたくはないな。

自分を変だと思ったたら、人間終わりだろう。

「これでいいか」

13ポンドか14ポンドか。迷った挙げ句、僕は14ポンドを選んだ。あんまり重くしても指に負担がかかるし、かといって軽すぎてもピンが倒れない。無難といえば、そんなところ。

空は18ポンドの赤ボール、くうは11ポンドと13ポンドの水色ボールをそれぞれ持って、第5レーンの席に座った。

「ねえホタル」

「うん？」

「どうせなら勝負しよ」

んあ。空らしい、らしすぎる案。娯楽に対決要素を導入するのは僕としては好きであっても嫌いじゃないのでいいけどさ。

実力は記憶によれば五分なので、それなりに賭けになるな。よし乗った。

「いいぞ。負けた方がジューズでも奢る？」

「なんでよ。ここは順当に、負けた方が奇声を発してレーン滑走でしよ」

「降りる！ 今後一切のお前の誘いから永久離脱するっ！」

順当ってなんだ順当って。珍しく今日はまともだから僕も普通に振る舞ってたのに無理だこいつあらゆる意味で。

というわけで、僕のモノローグはいつものように不満たつぷりなものになる。

「空、その罰ゲームは致命傷だろ。クラスのみんながいる上に状況的に笑えない」

「でも、あのピンの向こう側がどうなってるのか知りたいし」

「自分で行ってこい」

「嫌よ」

嫌なのか。

「危ないじゃない。人間の品性とか、あと摩擦で皮膚が凄いことになるとか、なんかあの奥、めっちゃめっちゃ機械音するし」

「幼なじみが忠告する。それを理解して持ちかけるお前って最低だ！」

「くりていかるあっぱー」

顎に一撃見舞われた。

「つおお……！ い、痛いだろ空！」

「良かったわねホタル。痛覚があること証明できて」

「前提証明から始まるのか!？」

うつつ顎痛い。なんかいつもより積極的に攻撃的というか。……

あれなのか。空はテンション高くなるところなるのだろうか。いらない新事実を発見。

ふと僕は周りをみた。ふんぞり返る空。いつも通り。ボールを床で転がし回すくう。いつも通り。

「あっ」

そうか。マリモがないんだ。あれがないから攻撃対象が僕だけなのか。

「あいつ一体……」

どこに行ったんだ?と思う矢先、ハウスポールの棚に何かが転がっていた。

「こけの……。むっすっす」

「……」

床に仰向けで国家を独唱する変態だった。ちなみに五分くらい前までは、僕が凹ませた悪友だった。

「じゅーこのよる……?」

「いや」

そんな虚ろな目で訊ねられても、ね。

始まる前から苦勞するのもなんだというか、そもそも娯楽は肉體疲勞と引き換えに精神快樂を得るものであって、その場合は肉體疲

労もなかなか気持ちいいものだと思う。

けど今はその正逆。なのかもしれない。どつぷり精神疲れたし。自ずとボーリング以降の予定、バイキングの昼食とカラオケもひどく不安なものになる。

とはいえ。その不安をどこか楽しむ僕であった。

「よし。張り切って遊ぶわよ！」

「張り切らなくていい張り切らなくていい。遊ぶならのん気にいこう」

言ったところで空のハイ状態を止められるわけじゃないのはとうに承知だけど。

スコアが表示される画面に、4人分の名前が表示された。ちなみにその手続きは空が名乗り出ていた。

第一投者。『クウ』。

小さい“ウ”が表示されるんだ。というか名前はカタカナ表示なんだ。

第二投者。『ワタシ』。

空だろう。しかしこの場合、“私”ってセンスはあり得ない。さすがだ。

第三投者。『ホタル』。

僕だね。くう同様、あだ名で登録か。

第四投者。『アアア』

消去法でマリモだな。最後に面倒くさがったのか空のやつ。でも

結果、“マリモ”より長かったりしてるんだが。

「くう、一番手はくうだったさ」

「うーす了解なり」

語尾に“なり”付けるのはあのアニメの影響なのか。地かも知れないけど。

元気よく拳手をしたくうは、11ポンドのほうのボールを掴んでレーンの前に直立した。

そしてゆっくり一歩二歩を踏みながら、同時に後ろへボールで弧

を描く。玉が軽いからなのかな。結構に深く後ろまで引く。
いやそれよりも。

「おお……」

なんかいつものへにゃへにゃした感じと違って、なんていうか様
になってる。

くうはそのまま振り子のように腕をスウィングし、ボールを床と
水平にスローイングして、

「クリリンのことかーっ！」

世迷い言をぬかした。どうでもいい話だけど、人類としてはクリ
リン最強らしい。他が地球外生命体ばっかで事実が霞んでるらしい
けど。

どっちにしても。ピンに向かってその台詞はないな。クリリンは
人工物に負けないよ。僕は信じている。

と、柄にもなく架空の人物を弁護する僕。たぶんこの前、くうに
借りたDVDの影響だ。

しかし最も柄にもないのはくうの投球に違いない。

速度32km/hという数値で飛んでいくボールは、真っ直ぐに
転がるというよりは横にズれる暇がないといった感じで、くうがリ
リースした位置から全くブレず、待ち構える三角形の頂点に衝突す
る。

パカーンと景気のいい音がした。軽くても速さで補えたらしい、
ボールは途中で怠けることなく、ピン×10をぶっ飛ばした。

「ナイスストライク。やるわねくう」

「まねー。おいたんもやるときはやるんだよ」

裏を返せば、やらんときはとことんやらないうってことだろうに。

「にしても、いきなり一人目の一投目からストライクか。意外と高
レベルな勝負になるかもなー。覚悟しといたほうがいい、マリモ」

「おいおい。まさか空の提案した罰ゲームが生きてるんじゃないだ
ろうな!？」

「大丈夫よマリモ。私の頭脳は止まるところを知らないから」

「自制しよう空。自制しろ空」

「なんで言い直すのよ……」

「いやほら、いいから早く投げろよ」

睨むような視線から逃げつつ、僕は空をそう急かす。

むつと忌々しそうに唸ったけど、空は赤い18ポンドのボールをわしつと掴み、投球体勢に入ってしまった。

重さとしては、中学二年の女子生徒にそぐわないよな。18ポンド。空の場合に限れば、その程度ならあまり関係ないけど。

彼女はボールに空いた穴（名称不明）に指を突っ込まないで、胸に、正確にいうと右脇に両腕を使って挟み込むように持ち上げた。

独特、というには珍しくないけど、それが空の投げ方のスタイル。小さい子供がボーリングをする要領と同じだ。

振れないから抱える形。けどそんな構えであるにも関わらず、空は豪快にボールを放った。

抱えている以上、上半身を低くしなきゃならない。空はバイクがカーブを曲がる時みたく、体をぐつと斜めに沈ませた。その上で遠心力と腕力を合算し、投じるといふより、射出に近い感じで赤い玉をピン目掛け飛ばした。

速度26km/h。速っ。18ポンドで中学生で一般的には腕力的にか弱い概念で通っている女子なのに速っ。

右端からレーンを進んだボールは、中ほどで緩やかに軌道をずらした。回転が掛かっているらしく、それも丁度いい具合らしく、くう同様それは三角形の頂点に衝突した。

バキーンと破壊力そのままな音がして、ピン×10が乱れ舞う。豪快すぎるストライク。空の表情を窺うと……得意満面だった。

どうだみたかと言わんばかりに、僕を挑発的な笑みで見つめる。

「ないすー空たんカツチョー」

「まあまあ。あれくらいはねー」

僕は皮肉が言いたくなかった。

「ナイスストライク。（ひねくれた性格を如実に現した）いい球筋

だったよ」

「ひねくれたとは失礼ね。せめて悪意は隠しなさい」

「鏡を見てから言ってくれ。……いや待て待て待て待て隠してるじゃない！ え、いや、（ ）を読んだの！？ 読心術っていつか悟りっていつか僕が悟られ！？」

「慌てるな螢斗。とりあえず投球したらどうだ？」

「そんなのより今の空の発言はおかしいだろ！」

「まあ空だから」

「納得！」

僕もそろそろ、空には常識が通用しないことを悟っていた。あらゆる意味で。

ボーリングの経験はあんまりない。最後が二年前くらいだから、今日のが二年振りになる。

その二年前の時は休日に関行で行ったんだけど、ハコ姉が驚異的スコアを叩き出した。確か250くらい。僕はまだ小学生だったけど、あの日ほどピンに感情移入した日もない。派手に散る白の飛沫を見つめながら、ああ平和は大切だなあと思っただけだ。

この頃は新技の実験台にされる度に、平和とか平穏とか無事とかの意味を身体で痛感している。文字通りの痛感。

そんな過去話はどうでもいいか。閑話休題。僕は経験こそ少ないけど、ボーリングは苦手じゃない。むしろ得意だ。ハイスコアは178。やっぱり、ハコ姉と似た遺伝子だけはある。

だから二年振りだろうが一投目だろうが、僕は全然これっぽちも緊張していなかった。

「ホタルッ。恥ずかしい真似しないでよね。隣人としてお願い。でも恥ずかしい目に遭っちゃえばいいのに。幼なじみとしてお願い」「螢たん。ガタツちゃダメだよ。によははー」

「転ける転ける転ける転ける」

「……」

僕は集中もできていなかった。

ちなみにマリモは断トツに下手くそらしい。なるほど、空とくうが上手なのを目にした以上、僕に落ちてほしいのか。転ける転けるね。うん、悪友だ。

多少うるさいけど投げるまであの声は止まないに違いないという判断に基づいて、僕はさっさと放ることにした。

ほいと。

「あつ……」

こういうのは投げた瞬間に解る。焦った。やってしまった。

14ポンドはやはり軽かったらしい。僕の黄緑の玉は時速26km/hで一気に進み、軽く曲がっていい感じに真ん中へ

いかなかった。すごい曲がった。角度45 くらいでギョんと左に向かった僕の玉（なんか嫌だなこの言葉）は、三角形の山を通り過ぎて、……ガコン。

「……」

やってしまった。

油が切れた機械みたく、ぎこちなく僕は振り返る。

「なーいすばー」

実に質の悪い笑顔で、空は拍手していた。ぐう。二重の意味で勝ち誇ってる空の表情が悔しい……。

空がストライクで僕がガーター。空より僕の球のがひねくれてた。の二重の意味で。

結局、僕はこの後スペアをとった。

そこから中学生にしてはなかなか高レベルな勝負は進み、穴から指が抜けなくてボールごとマリモが飛んだりとか、途中で二度曲

がるあまり活かされない魔球を空が放つたりとか、くうが7ポンドで時速37km/h（普通出ないし僕も出せない）とか記録したり、僕は僕でアウエーな雰囲気にかけてボールが後ろに引く時吹っ飛んだりとか、そう、なんだかんだいって、僕はかなり楽しんだ。

楽しみ過ぎなくらいに楽しんだ。クラス会というか懇親会というか、実際はものすごく個人的な理由で開催されたこの企画だけど……そう、きつと、誰も彼もみんな、楽しそうだった。いや、楽しんだらう。

名目でも委員長としては、嬉しいかな。空には今度、なにかお礼をしてもいい。本人にそのつもりがなくても、これは、たぶん成功だったんだと思う。

で、2時間後。2ゲーム分を僕ら第5レーンは終えた。以下は結果。

『クウ』：総スコア、313。

『ワタシ』：総スコア、333。

『ホタル』：総スコア、325。

『アアアア』：総スコア、110。

『アアアア』への罰ゲームは、ちょっと、名誉とか家名に係わりそうなものだったので自主規制という形で。

ふう。次はバイキングとカラオケ。絶対、普通じゃ済まないだらう。いいけど。

親睦の名の下に(中)(後書き)

今さらですけど、この物語は何と云うことない話ばかりです。ウサギ論がいい例かと。

崩れ気味のイントロダクション（前書き）

前もって書きますと、会話文がめっちゃめっちゃ多いです。あと一番、文の流れが危うい話です。

崩れ気味のイントロダクション

何ってわけでもないんだけどキャラクターの情報をまとめておいた方がいかなあと。僕が思うに自己紹介は最初の段階ですべきだよな。タイミング的にどっか微妙だと思わないでもないけど、僕としてもその辺の個人情報を知りたいところだ。やっぱり女子の秘密には興味があるよな。

「こう、スリーサイズとか腰が安産型なのかとか好きな調味料とかひっひっひ」

「やめる空っ！ 僕っぼくモノローグ語るなよ僕が変態みたいな誤解与えちゃうだろ！」

「私は心の代弁しただけよ」

「違う違う断じて違う。腰とか好きな調味料に興味ない」

「によは。志乃っちスリーサイズは否定しないんだ。えっちな螢たん」

ぐっ……。これ以上この二人に係わってもプライバシーが流出しそうなだけだな。話を進めよう。

「……ええと、今回は例の四人。僕と空とくうとマリモがいくつかの質問に答えて、それぞれの性格をもっと掴んでもらおうっていう主旨の企画です……と。えっと景ちゃ……じゃなかった天の声」

「ケート先輩。わたし、まだ名前しか出てないんだけど。そもそも天の声って何だよ？」

「モッチー……じゃなかった天の声ー。まだ出てないからその役目が務まるのよ？ 不満があるならマリモを自宅に郵送するわ」

「空先輩が言うオシャレにならないよっ！ マリモ先輩だけはぜっつたい無理」

「他はいいんだ……。まあいいや、それじゃ天の声、始めていいよ」
「もっつなんでわたしが……。はいそれじゃ朝霧空さん」

ぶつぶつと何か呟いてたけど、案外に素直な天の声だった。あと

でデザートでも買ってあげよう。

ちなみに景ちゃんの代わりに導先輩を呼ぶ案もあったんだけど、導先輩は三年生なのでやめといた。

「それではまず軽い自己紹介を」

「朝霧空。職業学生。好きな調味料は塩コショウ。でも目玉焼きは醤油派ね。あだ名は『深窓の令嬢』で、目下の趣味はお菓子づくりと裁縫。性格は控えめでおっとり系だなんていわれます。悩みは人の頼みを断れないことかな。てへ」

「空先輩っ嘘ついて良いイメージ作ろうとするなよっ！ ああもうっ。えっと事前アンケートによると……空先輩は二つ名が『学年最強の理不尽口舌。でも頼れる』。目下の趣味はケート先輩のお姉さんと麻雀をすること。うわ、おっさんじゃないか。性格は破壊衝動四割ボケ役二割幼なじみ五割リーダー五割。構成材料が訳わかんないよ……。あ！ しかも好きな調味料タバスコだ！ なんでそこ嘘つくんだよ」

なんか興奮してるなあ景ちゃん。じゃなかった、天の声だ。……もうどっちでもいいや。

ちなみに空の事前アンケートの情報元は僕だったりするわけだけど、得もしないのになんで空は偽情報を胸張って喋るかな。ふんぞり返る控えめな人間はいないだろ。

「あの景ちゃん？ 空はもういいから次に移って」

「ふーはーふー。……ええ、そうするよケート先輩」

僕のモノローグの間に空と口論を繰り返していた景ちゃんは、息を整えてから、落ち着いて落ち着いてと二度自分に言い聞かせてから、どっか吹っ切れた感じで声を響かせた。

「はい。出鼻からくじかれたけど、空先輩はアレなんで。気を取り直して次にいきます。ではクー先輩、自己紹介をどうぞ」

「みほによかくしゆかです。によはは」

「な、クー先輩なんで口もごもごしてるのさ！ ましゅまる？ ましゅまるなの？ 早く飲み込んでよっ！」

景ちゃんの要求通り、くうはマシユマロをぐつと飲み込んだ。この場合は飲食物持ち込み禁止なのに。まったくというかいつも通りと
いうか。

「ちゃんと飲み込んだよ景たん。ほらー」

「み、見せなくていいよっ！ それより自己紹介っ」

「はいと先輩の威厳もなにもなく、くうは常時発動のにへら笑いで元氣よく拳手をした。

「本名は御仄玖珠歌。みんなはくうって呼んでるよう。趣味はアニメ全般で、目下の悩みはバイトしてもバイトしても出費に追いつかないとこだよん」

「へーそうなんだ。それじゃクー先輩、好きなアニメは？」

「まずは1980年代からいくよ」

「いやもういいよ。キリがなさそうだから。次の質問は……これだ。くう先輩のバイトって何ですか？」

「守秘義務守秘義務。敵に顔が知られるとまずいから」

「うわなんか格好……よくないよ。アニメの影響が脳髓に染みてるなあ先輩」

「によははーさんきゅ」

「誉めてないよ。……て、またましゅまる頬張りだしたし。いいや、それじゃ次はケート先輩」

「だんだんと投げやりだね景ちゃん」

「ケート先輩の紹介はわたしがするよ」

なんか話を無視された。まあ僕でも空とくうの紹介タイムは呆れてばかりが多かったけど。この面子じゃ詮無いと思う。

「志乃坂螢斗。空先輩とは家が隣同士の幼なじみで、主な担当はツッコミ。統計だとマリモ先輩の次に殴り心地と技のかけりがいい人で、お姉さんにはいつも使い走りや技の実験台にされている。空先輩とお姉さんが仲良いから、間接的に空先輩にもあまり逆らえないと。……すごい環境だねケート先輩」

「……」

誰がまとめたデータかは知らないけど、なんでだろう、不思議なくらいに的確すぎた。凶星すぎて笑えてくる。

「……えとケート先輩。当たり障りのない質問するね」

なんか景ちゃんが気を遣ってきた。後輩にここまでさせる僕の環境って……それほど不遇なのかな。

「何か世界に向けて言いたいことは？」

「景ちゃんラブ」

「それでは最後、マリモ先輩」

ああっ冗談だったのに。なんか本当っぽくなってしまった。それで、遠くから空とくうが笑顔で手を振ってくるのはどういう意味なんだか。寂寥感より恐怖感が強まってくる。

景ちゃんは心底めんどくさい風にため息をついていた。やる気が失せたらしい。ん、我が先輩ながら実に素直素直。

素直に鬱々してきた景ちゃんの声の調子だけど、マリモでこの紹介も最後だから保つだろう。たぶん。

「よしっ。やっと俺の出番だな。ちなみにこれが第一声だ」

「マリモ先輩のもわたしがやります」

「出番とんないでー！ただでさえ少ないんだからー！」

「本名は鞠本……下の名前は解らないや。性格というか気質はいじられキャラ。わたしは雑魚キャラだと思っよ。雑魚キャラ。以上終了」

「雑っ。俺に質問はないの質問！」

「生きる意味ってなに？」

「……………」

「無回答。つまり無いんだって。どんまいマリモ先輩。それではこの辺で。司会、天の声でしたー」

との声を最後に、天からの声は切れてしまった。正確にはスピーカーからの音が。

え、あ、これでいいのか。でもなんか機材も撤収に入ってるし。

景ちゃんも本当に帰ったみたいだ。そういえば観たいドラマがどう

のこうのって言ってたな。だけど、なんだかこれって……

「よし。終わったことだし帰るわよホタル。くうも私ん家でご飯食べてく？」

「空たんが作らなければ」

「出番……俺の出番……」

「んーと」

これってやつぱり、

「企画失敗」

だよな。それはそれで僕達らしいってことにしようか。

「ホタルッ。私ん家寄るわよね？ いや寄りなさい。これ指令」

「ああわかったよ」

「出番……出番……」

というわけで、学校の放送室（空の交友関係で使用可）からお送りした、僕らの自己紹介でした。提供、空じい・カズ先、協力、放送部です。また来週、はないと思うけど。まあこんな感じで。

崩れ気味のイントロダクション（後書き）

と、前書き通りなわけでした。

親睦の名の下に（後編その1）（前書き）

ていうかやばいな色々。書きかけだったのを急ピッチで仕上げたのでその1なんてことに。

親睦の名の下に（後編その1）

「ええと、そんじゃ僕の苦勞を労ってー」

「ねぎらってー！」

「平穩無事な明日を祈ってー」

「祈ってー！」

「とりあえず乾杯ー」

「乾杯ー！」

こんな時ばかり一体感が芽生えるクラスメイトの野郎共と女子達が、僕の合図を復唱しながら互いにグラスをぶつけ合う。

ボーリングを終えた後の実にフレッシュな気分で、昼食にがっつきはじめるクラス一同であった。

なんだかノリで乾杯の挨拶までさせられたけど、うむ、なかなか楽しそうなので良しとしよう。

多分あれだろうな。空が選んだこの店が、バイキング方式だったのも盛り上がりに一役買っているのかもしれない。

「ともあれ、ようやく昼か」

時間帯にはいい感じの胃の空き具合。やっぱり身長伸ばすためにも、成長期の今はガッツリいっところ。ガッツリと。

とか将来の理想像を浮かべながら、僕は例の三人が待つテーブルへと足を運んだ。この場合、正確には空達は待っておらず、既に何か食べ始めてたけど。

店内の座敷スペースのほぼ中心に位置するテーブル。空の横、マリモの正面に腰を降ろして、ひとまず割り箸を割ってみる。ちなみに、割り箸は横にして割ると綺麗に割れるってCMでお姉さんが言ってた。

まあ、何はともあれ。

「いただきます、と」

「ちよつ、空！ それ俺んこの植民地の肉だろうが！」

「知ったことじゃないわよ。あん」

「うあああつ！」

「……」

「まあまあ。マリモンどんまい、って空たんそれおいたんの育てたお肉ー！」

「ふっふ。くう、合戦においては油断したものから食われていくのよ」

「によーっ！」

「……あのさ」

網の上で繰り広げられる不毛な争いに、思わず口を出したくなかった。

口いっぱい肉を頬張りながらもりもりと咀嚼する空が勢い良く、なぜか応募者全員サービスで商品が届かなかつたみたいな顔のマリモとくうがゆっくりと、真逆な動きで僕に注目を寄せる。

「バイキングだから食べる分がなくなるわけじゃないだろ。くうもマリモも凹んでないで次のを焼いたらいいだろ」

敢えて空の強奪行為に関して触れなかったのは、どうせろくなことにならないと踏んだから。刑法二百五十二条も何のそのな奴だしなあ、友達間での食べ物については。

空を見やると、僕に注意が移ったのは一瞬だったようです。新しい肉を焼いていた。

そして被害者の二人は、

「螢斗、お前は何かわかっておらん」

「そつだそつだー！」

……いやに真剣な目だった。うわあ面倒。

「志乃っちは何にもわかってない！ この鉄板の上で大事に大事に育てたお肉……。手塩にかけたそのお肉が奪われる悲しみが志乃

「うちにはわからないのか。このおいたんの愛情が！」

「いや、そんだけ愛情込めたら食べる気がしないだろ」

「獅子は我が子を谷底へと突き落とす！」

「この場で用いてもフィット感ねえよ」

「……なんだかわけがわからなくなってきた。ていうかマリモとくうがわからなくなってきた。肉に感情移入するのは人としてどうだよとか谷底っていうか胃袋だなとか、言いたいことがありすぎて逆に言葉が出なくなってしまう。」

「ただ一つだけ。すべてが突っ込める要素で構成されてたのに、そのはずなのに、最後の獅子云々も支離滅裂なのだけれど、なぜだろう、すごく不思議だった。」

「親が我が子を。ハコ姉が僕を。同じく家庭内バイオレンス。ちょっとだけ親近感を覚えたよ獅子くん。」

「によ！ さては志乃っち、空さんと密約を交わしてるねっ。だから地主の空さんを擁護してるんだ。うん、きっとそうだ。この世渡り上手ー！」

「放っておくとあらぬ疑いをかけてくるくうだった。それよりも、いつの間にか空は地主でくうは小作人みたいな身分差が……。」

「別に空とは契約もなにも……」

「やーやー。だとすれば志乃っちが知らない内に結んだんだよ。幼なじみだから」

「幼なじみの関係にそんなアビリティーは付かないぞ」

「や。だとしたら裏技であるんだよ。下上下下スタートBみたいなコマンドで」

「僕らはいつからゲーム内のキャラに……」

「たぶんついさっきくの脳内世界でだろうけど。」

「というかあれ。肉は際限なく持ってこられるんだから、まあ焼いた手間とかそういう損失は別だけど、食べられないわけじゃないんだか ちょい待った。」

「僕は、焼く・噛む・飲むのサイクルを十五秒間隔で続ける空と、

その空に揉み手をしながら何故かゴマをすっているマリモ、僕の襟首をつかんでコマンドの解説を始めたくうの顔を順番に眺めて、それから確信した。

……おかしい。

ちなみに現在、食べ始めてから三十分は経過している。問題はそこじゃない。

三十分。そんだけ時間が経ってるのに、僕は当然として、他の三人の誰も席をたっていない。

バイキングなのに席を立っていない。だが肉は途切れることなく、鉄板のうえに供給されている。

……おかしい。

「あのさ、空。この肉、どこから補給してるんだよ。まさか他のところからかつさらってるわけじゃないだろうな」

「大丈夫。私たちが取ってきた分だから」

「ならいいけど……」

よくよく考えれば、空はずっと鉄板を前にしているわけだから、他の班から強奪してきたわけがないよな。

日頃の行い、特に金曜や土曜みたいな『次の日が休日の時』に空にされる僕の部屋でのあれを思えば、その線が一番濃いと思ったんだけど……。

まあいいか。それで、

「空、肉はあとどれくらいある？ どうせならサラダとか中華類とか、次はそつちを持ってこようと思うけど」

「んー。まあ、これくらい」

箸を口にくわえたまま　これマナーとしてどうよ　空は一度テーブルの影に隠れた。

そして何やらもぞもぞと動いて、顔をあげ、その手には、
「なっ……」

五皿。直径三十センチの皿が五皿！　ていうか肉が並べられてない。積もってる！　肉積もってる！

「まあたつたの五皿だけど。　　とと、いっぺんに持つのはきついわねやっぱ」

「ていうかバイキングの楽しみを早々に奪ってんじゃねー！」
ちなみにバイキングの店なら当たり前のルール。取った料理は戻せません。取った分を残した場合、追加料金をいただきます。

……四人であと五皿。肉の総重量およそ三キロ。一人当たりのノルマが、七百五十グラムステーキだった。おおう。

親睦の名の下に（後編その1）（後書き）

ていうかやばいな色々。ネタの盛り込みが足りてなかったのに。まあ、次以降がんばれたらがんばります。ていうかジャンル学園らしいことしてねーなあと。

いっぽうそのころ・その1 (前書き)

更新停滞してたお詫びもかねてのおまけ。 たった今書いてみた。

いっぽうそのころ・その1

「でき、今日はケート先輩たち、クラス会なんだって。どう思う、琴？」

「それはそれは最悪な。どう考えても何か起こるとしか考えられませんがね」

たしかに私もそう思う。というより、ケート先輩以上にアレな空先輩がいるし、もっというなれば一つ上級生の二学年は、何やら頭のネジがしまりすぎて脳内に食い込んでいる人達ばかりだと噂を聞いたことがある。

いや、なんというか、主に空先輩が噂の根元なんだろうけどさ。

蓮源寺家の、同級生の琴の部屋でくつろいでいるちょうど今頃、空先輩たちは全身全霊で遊んでいるんだろうなあ。

壁にポスターもないし、木目のついたクローゼットと未使用みたいに綺麗なベッドと、琴と一緒に宿題を並べているこの机と小さなテレビ。

うーん。自分と比較してだけど、どうにもシンプル過ぎるといってか地味というか。

「ねえ琴、なんかポスター貼ったりとかぬいぐるみ飾ったりとか、そういうのしないの？」

ノートに走らせていた鉛筆を止めて、琴は精密な絵画みたいな白い顔をこつちに向けてきた。

「景、気付いてしまいましたか……」

やけに敵かにつぶやくと、琴は何もいわずうつむいた。

あれ。えと、なんだろうこの感じ。

「実はわたし、派手なものをみると死んでしまう病に冒されているのですよ」

「深刻そうな演技しといてあからさまな嘘つくなー！」

「な、なぜ嘘だとバレたのですか……」

「そんな病ありえるわけないじゃん。ていうか本当だったら、空先輩をみて生きてるのはなんでさ」

「琴、不覚です……」

……なんか悔しそうに床を叩き出した琴だけど、どうしようか。

放っておくことに決めて、数学の宿題に取り組むことにした。普段は琴と一緒に空先輩やケート先輩の家で教えてもらうことが多いけど、今日は二人がいないからなあ。

なんだかんだあの二人頭が良いし、でもあんなだし、世の中は不思議だ。

と。一問目、二問目は簡単に解けたのに、三問目の応用問題になると、どうにも行き詰まってしまう。

「琴、ちよつとノート借りるよー」

……つて。まだうずくまってるよ。そんなに見抜かれたのが悔しいのか。完成度はずいぶん低かったのに。

まあ、今は数学数学。琴は数学は得意、というか得意を超越して天才だからなー。ふえるまーの最終定理とかなんとかを自分で解いてたらしいけど、あんまり凄さが伝わらない。テストで毎回満点だから、やっぱり天才なのは確かみたいだけ。

期待というか確信をしながら、ノートを一ページめくって、

「……シャープの極め方？ 琴、なにこれ」

「ああ。纏から教えてもらったものです」

けろりとした表情で、机を肘で歩きながら琴がこつちへ身を乗り出す。私が覗き込むページを指差して、

「シャープを正しく発音するための手順です。わたしはまだ時折しかできませんが」

一、と書かれた横の一文を、指でなぞりながら琴が読み上げる。

「横隔膜を凹ませるイメージで呼吸したあと、二秒間停止する。景、やってみてください」

「わかつたけど……」

……いや、全然わかんないけど。横隔膜ってなんだよ。お腹の辺

りでいいのかな。

とりあえず目いっぱい空気を取り込んで、指示通りにやってみる。二秒の停止の間に、琴が次の文を読み上げた。

「内側から眉間に空気を刺すつもりで、鼻から息を抜くイメージのまま『シャープ』と発声」

ぐ、具体的すぎて逆に難しい。よくわからないまま、それでも言われた通りに、鼻から息を抜いて、眉間を内側から刺し……たと思ふ。あとは、

「シャープ！」

「……全然だめです」

なんかダメらしかった。

琴は首を振りながら、やれやれみたいなポーズをする。現実こんなジエスチャーする人がいるんだなあ、というか友達かよ、とか思ってしまった。

「わたしはまだ未熟なので修行中ですが……」

といて、琴は小さく胸を張った。あんまり私と変わらないような気がするけど……。

と思つた矢先だった。

「！」

「……え？ いや、ちよつ、あれ？」

今なんか、縦線二本横線二本の記号が聞こえたような……いや、記号が聞こえるってなんだ。マリモ先輩みたいな奇言を述べたらダメだぞ私。

「どうですか？ 景、これが真の ですよ」

「ま、また言った……」

どうやら私の頭がマリモ化したわけじゃないらしい。ひとまず安心。

いや、

「琴、いつの間にそんな宇宙言語を……」

「いえ、わたしの家族はみんな操れますよ。兄のような達人クラス

になると、アスキーアートも話せます」

「いや、もうそれ言葉じゃないし」

恐るべし纏先輩。というか恐るべし蓮源寺家。

「では景、まずは基本レベルの『!』からです」

「エ、エクスクラメーションマーク……」

というより、なんでレツスンを受けるみたいな感じになってるんだよ。突っ込みつつ、まあそれなりに興味はあるのだけれど。ああでも、日曜に何してんだろうなあ私。

ふと、窓を眺めながら想像する。

……今頃ケート先輩たちは、激しく人生を間違えたこととしてんだろうなあ。

親睦の名の下に(後編その2)(前書き)

たまには早めに更新なんぞしてみる

親睦の名の下に（後編その2）

「うあーもうだめー」

「凄まじく迷惑だなこのやろう……」

空のやつ、空腹の時のノリであれだけの肉を持ってきてというか盛ってきたながら、最初にペース飛ばしすぎて自分がまっ先にダウンするという、激しく典型的な駄目人間だった。

今後一切、コイツとはバイキングにいくまい。

頑なに腹に誓ったところで、残り二皿を前にしながら、マリモと一緒に黙々と食べ続ける。

……楽しくねえー。

ちなみにくうは、あんなでもやっぱ女子らしく、三皿目あたりでギブアップ。現在は寝転がってHP（腹減りポイント）を回復中だ。というか、女子男子の区別以前に中学生と大人の、そして人間の胃袋の限界というのがあったりして。

……やばいな。マリモと二人でもさすがに……。

「なあマリモ。この際、頼んでも他の班に分けて回ったほうが早くないか」

「確かに……。そろそろ肉片恐怖症になりかねないしな」

視線をぶつけ、頷きひとつで意思を確認。そういや、久々にマリモとまともな話をした気がするな。

とりあえず僕らのそれぞれで一皿ずつを手に乗せて、そうだな、やっぱりまずは運動部連中がいいだろう。肉といえば汗くさい連中公式だ。

座敷テーブルの一番奥、二方までを壁に囲まれたテーブルに野球部三人衆を発見した。野球部、すなわち汗の筆頭。笑顔で平らげられるに間違いはない。

これでなんとかなるな、などと安心を得つつ進んでいると、……よくよく確認すればそこで、何やら野郎どもがテーブルの中央を囲

んでいた。

……なにしてんだこいつら。他の班の男子も混じってるとこみると、きつとろくなことじゃないなこれ。

「斉藤ー、ちよつと頼みがあるんだが」

「おつ、おお。螢斗か。頼みってなんだ」

ちなみにこの次期野球部キャプテンらしい斉藤は、うちのクラスではマリモへの刑執行という重要なポジションについている。

ところで。坊主頭じゃなければそこそこ美形な感じの斉藤は、何やら眉をさげて困った表情をしていた。

なんだかそんな相手に頼み事は気が引けるなあ……いや、背に腹はかえられない。

「これとこれ、二皿を片づけてほしいんだよ。取りすぎてうちの班じゃ食べきれなくてさ」

「……………そうだな」

独り言をつぶやくようにそう口にした斉藤は、肉二山を、次にテールのほうをちらりと窺って、

「おう、いいぞ」

なんだ、溜めたわりにあっさりしていた。そう思いきや、こちらへ人差し指を立てて、

「ただし、あれを処理してくれたらな」

つぶらな瞳で駆け引きを持ち出してくる斉藤だった。中学生にもなると、お互いこの辺の利用は抜け目ない。

「まあ、その“あれ”ってやつがこれなんだが……………」

といって、他の男子が眺めていたそいつを、斉藤は僕とマリモの前に差し出した。

はしゃぎすぎた学生がこういうクラス会みたいな場で、とりあえずやっつけてしまおう馬鹿なこと。

いろいろ思い浮かぶが、筆頭は『ミックスジュース作り』だろう。斉藤やその他モブキャラの説明によると、マリモが手渡されたそのグラスの中身 底に固形物が沈殿し、流水の天使ことクリオネが舞うかのごとく液中に微細な粒が漂って、上の三割が泡、下の液体部分もオレンジがかつた草餅みたいな色をしている をノリで作って見たはいいものの、味覚を根こそぎ奪いかねないあまりのひどさにどう処理すればいいか当惑している、だとかなんとか。なるほど、どうりで隅に隠すように、五分分ほどの屍が積んであるわけか。

「俺らじゃもう手の尽くしようがない。頼む、螢斗！」

「いや、ま、僕は肉さえ食べてくれるならそれでいいけど」

「ほんとにいいのか！？ いいんだな？」

「え、ああ、うん」

泣いて喜ぶ斉藤とその他モブ達だったけど、実はちよつとした理由があつて、こんな安請け合いましたわけなんだけどね。

ちなみにジュースの成分の概要。

下に沈んでるやつ……パイナップル、肉、レタス、エビチリのエビ。

液中を漂ってるやつ……ポテトサラダ、ゴマ、エビチリのチリ、マヨネーズ。

泡部分……自然発生。

液体部分……オレンジジュース、メロンソーダ、ジンジャーエール、カルピス、烏龍茶、焼き肉のたれ、肉汁。

とりあえず中学生諸君、兵器を開発するのは憲法違反だから。

だけどもあ、これを爆発物とするならば、僕とマリモは爆弾処理班みたいなもんだ。

「じゃあマリモ、頼んだ」

「やっぱ俺の役回りか……」

といって、マリモはため息をしつつも口をつける。

躊躇いはまったくなし。泡から流し込むようにして、続いてでる

でろした緑とオレンジの液を流し込んで、最後に軽く底を叩くと、張り付いていたエビが落ちてくる。

一気飲みで飲み干したマリモは口元をぬぐった。

「レベル9。一般人の作品としてはそんなもんだろ」

平然とした様子のマリモの感想を聞いて、僕はふむとうなずいた。「なんだ、最高記録の14分の1くらいか。やはり素人は素人か」と、下を見ている。座りながらマリモの飲みっぷりを拝見していた斉藤と他は、魂が抜け出たような呆気の表情のあと、我に返って目の前の光景を否定するように首をぶんぶん横に振った。

全員的首振りリズムが一緒だったのでちよつと気持ち悪かった。

「いや、マリモ、お前へいきなのか……？ だってあれで犠牲者が五人も……」

斉藤の驚きの問いは、僕とマリモにとっては愚問だった。

マリモと視線を交わし、こくりと頷き、二人並べて親指をぐつと突き出して。

「あんなものは雑魚にすぎない。なぜならこっちは、空の手料理をしょっちゅう食わされているから！」

要は慣れ。そういう話なのだった。その方面において、空は完全無欠にして唯一無二のプロフェッショナルである。

……冷静に考えると、味覚が麻痺しているのかもしれないんだけど。辛い料理以外でも、味覚は麻痺できることを証明できる数少ない人間が、実は僕やマリモやくうだったりする。

ちなみに空は先天的に味覚がアレ。そこは、まあ空だから、一言で片付けられる話だろう。

親睦の名の下に（後編その2）（後書き）

まあ学園はノリなので文が粗くてもありかなと。ファンタジーのほうはあれですが。

いっぽんそのじふ・その二(前書き)

まあ伏線用の話。つか眠ー

いっぽうそのころ・その2

例えばそれは、自分がいつから言葉を扱えるようになったかを知らないようなものらしい。お母さんの話によると私が最初に喋った単語は、ぱぱでもママでもなく『もざいく』だったらしいけど、そんなことは覚えてない。

琴のいう未熟とはどうやら、顔文字が喋れないとか“！”が七個までしか連続で発せないとかそういうレベルらしく、たいていの記号はそれこそ日本語感覚。気付いた時には話せるようになっていたのが、蓮源寺家らしかった。

周りで使ってれば自ずと、とかそういう感じなのかな。

「ほ、ほしっ……!!」

「違います。つです」

もー、なにがなんだか。かれこれ一時間で基本らしいの“！”“？”は習得したけど、星みたいなまるっきりの記号になると舌がうまく回らないや。

きつと、その先は人外の者しか踏み込んじゃいけないよ、って警告なんだろっな。

「ふへー、ちよつと休憩ー」

と、講義の時間をすこしの間だけ中断して、冷たいお茶に手を伸ばす。喉に通してみると、ああ、普段より酷使したせいで妙にすつきりした感覚がー。

琴もさすがに疲れたのか、そうですね、と一言だけ言って烏龍茶に手を伸ばす。

両手で持ったグラスを傾けてちびちびと飲みながら、横目で私を見つめる。

「まあ、素人さんであれだけ出来れば上出来ですよ」

「そうなんだ」

上出来なのか。ていうか、やっぱ一般人が扱う代物じゃなかった

んだ。納得。

「しかしあれですね。蓮源寺では当たり前なことを、当然のことを人に教えるというのはなかなか難しいのです」

「琴からすれば、そうなんだろうよ」

「琴本人のいうように、当然のことを教えるのは難しい。今だから思うけど、1たす1は2つてことを教える小学一年生担当の教師つて、実はすごかったりして。」

「兄がいれば、もっとコツを教えてくださいなのですが……」

「そっいや、纏先輩はいま外出中？」

「ええ。六館と一緒に、みやあみやあ喋るヤンキーと素晴らしくそのまま眼鏡キャラな眼鏡と遊んでます」

「……導先輩はわかるとして、他の二人はなんだろう。みやあみやあつて。」

「そんな目立ちそうなヤンキーと眼鏡の人、うちの学校にいったけ？」

「そいつらは高校生です。来年には大学生ですが」

「どこでそんな交友関係を結んでるんだよ纏先輩……」

「世の中は案外、変なものだらけなのですよ」

どこか悟った風な琴は、二杯目を注ぎながらそう付け足した。

「変なもの、ねえ。その言葉ですぐにイメージが浮かぶのは、やっぱり空先輩たちなんだけど。」

「変とあの人達は切っても切り離せない因果があるし。というか変態性がアイデンティティだしな」。

「……そっいや琴。話変わるけど、夏休みに何か予定ある？」

「今は七月。もうすぐ最大級の休暇がやってくる。肌をなめる空気も梅雨が明けてからは、湿気じゃなく湿度を帯びてきた。」

「夏休み……。そっいえば、もうそんな時期ですね」

顎に指を添えて琴は一考のポーズ。

「……まあ、数日を除けば、たいがい暇ですね。旅行の予定もありませんし」

「だったら最初のほうにでも遊びにいかない？ どうか海にでも」
「ほう。なかなか良い誘いですね。それなら、蓮源寺の別荘があるのでそこに二泊ほどするのはどうでしょう？」
「別荘あるのか。さすが金持ち、その辺はぬかりなく所持しているものらしい。」

「じゃあ、帰宅部の合宿つてことで、空先輩たちも呼んでみない？」
「そうですね。毎日迷惑をかけられてますし、その恩に対するお返しとして、そうしましょうか」
「文脈が変だ」

後々、空先輩たちを招いたがために、なんだかエキセントリックな目に遭うことを、私がこの時点で知る由はなかったのだけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0952c/>

ランブル空もよー

2010年10月10日12時07分発行